魔法少女リリカルなのは　～転生少年は世界に抗う～

三浦一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～転生少年は世界に抗う～

【Ｎコード】
Ｎ９９０７Ｑ

【作者名】
三浦一平

【あらすじ】
目の前に現れたのは冥府の王にして転生を司る神！？
なに、俺を転生させてくれるだと？しかも、転生先はあの魔法少女リリカルなのはの世界！！
転生少年はなのはの世界でどう生きる？
諸事情により題名を一部改名しました

プロローグ（前書き）

作者が衝動的に書いたなのはの二次創作です！
生温かい目で見てやって下さいｍ（＿）ｍ

プロローグ

衝撃が俺の体を襲う。

手の中に有るのは小さな命。

鈍痛が全身を支配し、血が体から流れるのを感じる。

（ああ・・・俺、死ぬんだ・・・）

そして、俺は意識を手放した。

「・・・・・はっ！！」

俺は唐突に目を覚ました。辺りはプラネタリウムの様に星が散りばめられている。

「目を覚ましたか少年。とりあえず、おはようと言っておこうか」

すぐ近くからかけられる女性の声。

「誰だ！」

声のした方向を見ると銀髪の美女が立っていた。

「私は、ヘカテー。冥界の王にして、転生を司る者だ。

ところで少年、自分の状況を理解しているか？」

「状況？・・・・・何じゃこりゃぁぁぁ？！？」
見下ろした自分の体は血まみれのボロ雑巾状態。
ていうか、間違い無く死んでるだろこれッ！！
「そうだ、お前は死んだ。しかし、お前の場合少し特殊でな」
「特殊？てか、なんで俺お前とこんな所にいるんだ？」
目の前の美女、ヘカテーと名乗る冥界の王？が苦笑する。
「お前・・・か、せめて名前で呼んで欲しいものだな。
まあ、そんな事はどうでもいい。少年、死ぬ前の事は覚えているな？」
「分かったよ、ヘカテー。んで、死んだ時のこと？確か・・・」
そう、確か下校中にふと道路を見たら偶々ネコが道路にいて、
丁度いいタイミングでトラックが来ていて、
あ、これはネコ死んじゃうな～と思ったら体が勝手に動いて気が付けばトラックに轢かれていたと。
「こんな感じじゃなかったっけ？」
満足そうにうなずくヘカテー。
「そうだ。少年は良い行いをして死んだ。なので冥界の王にして転

生を司る私が少年を転生させる」

「そりゃありがたいけど・・・転生って、元の体に戻せばいいじゃん」

「少年は死んだ者がいきなり起き上がったらどう思う？第一に、」

そう言うと俺の体を見る。

「その体で戻っても精々植物状態がいいところだ」

あ～、そうですか・・・・

「それで、俺はどの世界に転生させられるんだ？」

「ふむ、切り替えが早いな少年。転生先は少年の世界で言う、『魔法少女リリカルなのは』という世界だ」

魔法少女・・・・リリカルなのは！！？

「え！あの、神世界に行けるのか？」

「・・・食いつきが素晴らしいな」

当たり前だッ！！なのは、は俺が一番好きなアニメだったんだから！

「それで、転生にあたり少年は三つの願いを叶える事が出来る。大抵に転生者はチート能力を願うがな。ちなみにデバイスはサービスだ」

また苦笑しながらヘカテーが言う。

「気前がいいね。それにしても三つか・・・・・・よし！決まった！」

これならどんな状況も切り抜けられる。誰も、傷つかずにすむ。

「ふむ、では聞かせてもらおうか。願い事の数を増やすのは禁則だぞ」

「そんなのは分かってる。それじゃあ・・・」

一つ目は、複写眼（アルファスティグマ）

二つ目は、知恵の泉（ミーミル）

三つめは、ステータスＭＡＸ

「これでどうだ？」

「ふむ、それぐらいならいいだろう。デバイスの希望を言ってみたまえ」

「それも決まってる」

一つ目、インテリジェントデバイスで名前はシュバルツ。男性で特性は全てを飲み込む。

二つ目、インテリジェントデバイスで名前はヴァイス。女性で特性は全てを生み出す。

三つ目、ユニゾンデバイスで名前はツァーリ。女性。

「こんなんでどう？」

「まあ、いいだろう。少し待て」

そう言うとヘカテーは後ろを向く。そのまま十数秒。

「ほら、お望みのデバイスだ」

ヘカテーの手に黒と白のブレスレットと銀髪金眼の少女が居た。

『よろしく、我が主』

『よろしくね～、マスター』

『よろしくです！マスター』

「おお！みんなよろしくな！」

右手にシュバルツを左手にヴァイスをはめる

『私はここがいいです！』

そう言ってツァーリは俺の頭の上にチョコンと座る。

「気にいってもらえた様で何よりだ。さて、そろそろ転生の時間だ」

ヘカテーがそう言うと銀髪が輝きだし、

「新しい人生を楽しんでくるといい」

パチンッとヘカテーが指を鳴らす。

パカッ

・・・・え？

「それでは少年、転生先で頑張れ」

足元に黒い穴が開いていた。

「うわわああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁへ～～カ～～～テーーーーー！！！！！！」

最後に見えたのは眩しいぐらいに笑顔のヘカテーだった。

「・・・・・・はっ！！」

なんかデジャヴを感じる目覚め方だけど、とにかく目を覚ます。

辺りはちょっとした林になっていて誰も俺に気づかない様になっている。

『マスター、ヘカテー様からの手紙がポケットに入ってますですよ』

見ると俺の服はきれいな物に変わっていた。

まあ、あのまんまじゃ絶対おかしいもんな。

ポケットを探ると指先に紙の感触。

「ええ～なになに、これを読んでいる時は無事に転生が完了したようだな」

無事じゃない場合もあったんかッ！！

「それで、一応家を用意しておいた。行き方はツァーリは知っている。最後に、鏡を見てみるといい」

鏡？キョロキョロと辺りを見回してカーブミラーを見つける。

そこに映っていたのは・・・・・・はい？

「これ・・・俺？」

そこには身長１３０？ぐらいでちょっと長めの黒髪をした少女が、黒曜石の様な漆黒の瞳でこちらを覗いていた。

プロローグ（後書き）

さて、三浦が衝動的に書いてしまった小説ですが、感想と指摘を待っています！

「魔法戦記ウィザーリア」の方も書いていきますんでそちらもよろしく！！

第０１話　出会いは突然に・・・なの（前書き）

さて、意外にも続きそうな三浦の衝動書き
第０１話をお送りします、どうぞ！！

第０１話　出会いは突然に・・・なの

とりあえず、容姿が少女みたいになっている事や、身長が１３０?ぐらいになっている事などに一通り驚いてからオレは、

ヘカテーが用意したという家へ向かうことにした。

『この道をまぁっすぐ進んだ所にある、大っきなマンションがマスターの家です～』

ツァーリが示す方向には確かに大きなマンションがあった。あったのだが・・・・

「なんか見覚えがあるな～。どこで見たんだろ?」

初めて見た気がしない大きなマンション。

『主は転生したのだろ?前世で同じ様な建物があっても不思議ではない』

オレの疑問に念話で答えるシュバルツ。

「そんなもんかな?」

奥歯に何か挟まったような感覚が消えないまま、これからの自分の家へと歩き出す。

ちなみにツァーリには、他の人に見つかるわけにはいかないので
金の宝石に銀の鎖が巻き付く意匠のペンダントにになってもらって
いる。

原型は「灼眼のシャ〇」に出てくるコキュートスだ。

『それにしてもマスターってホント、女の子みたいよね～』

今度はヴァイスが念話で話しかけてくる。

・・・・人が気にしている事を。無言で左手のブレスレットを握る。

『い、イタイイタイ！ごめんなさい、もう言わないから離して～、
割れちゃうわ！』

ヴァイスの悲鳴が念話で伝わってくる。

（次言ったら・・・分かってるよね？ヴァイス）

『わ、分かったわ（泣）』

おとなしくなるヴァイス。

なんか、この短時間でデバイス達の位置づけが決まってきたな～。

シュバルツは真面目なお父さん、ヴァイスが弟をからかうのが好き
なお姉さん、

ツァーリはしっかり者だが少し甘えん坊な妹ってところかな？

（それと3人とも、オレの事は名前で呼んでくれって言ってるじゃないか）

『『『それはダメです（だな）（よ）』』』

みごとなシンクロで答える3人、いや3機か？

『主は主、それ以外は認めん』

『そうよ～、マスターはマスターなんだから』

『ですです！』

3機それぞれの言葉で言い返してくる。

（分かったよ・・・好きにしてくれ）

呼び方を変えることを断念するオレ。

気がつくと大通りに差し掛かっていた。

車がすごいスピードで走っている。

ふと、ホントになんとなく道路を見た。

すると、信号が赤の横断歩道を歩いている少女を見つけた。

自動車が猛スピードで向かって来ているが少女は、

何か考え事をしているのかそれに気づいた様子が無い。

危ない！そう思って走り出すがとても間に合いそうにない

自動車の鳴らすクラクションでやっと自分の状況に気づいた少女が慌てるが、

足がすくんだのかその場から動けないでいる。

（間に合えッ！！）

自動車が少女にぶつかる寸前、いくつかの事が同時に起こった。

少女が道路で立ちつくして動かない事に驚いた自動車のドライバーがブレーキを踏む音。

『ｓｏｎｉｃｍｏｖｅ！』というツァーリの声。

急速に後ろへ流れていく周りの景色。

自動車が止まった時、オレは少女を抱きかかえて向かいの歩道に立っていた。

（一体なにが？）

いつの間にか少女を抱えて道路を渡り切っていた事に戸惑いを覚える。

『マスターは魔導師ですよ？魔法を使ってマスター自身のスピードを急激に上げたですよ』

・・・そうだった。転生したオレは魔導師になったんだった・・・・・すっかり忘れてたよ。

（ありがと、ツァーリ）

『いえいえ、です』

念話で突然の事に対応してくれたツァーリに感謝する。

そういえば・・・・

「えっと、大丈夫？」

抱きかかえている少女に聞く。

少女はしばしポカン、とした後頬を赤く染め始めた。

「あの、顔が赤いようだけど・・・大丈夫？」

「だ、大丈夫なの！」

今度は少女から返事があった。

とりあえず見た感じは怪我などは無いようで良かった。

「あ、あの・・・お、下ろしてくれませんか？ちょっと恥ずかしいの」

少女がさっきより顔を赤らめて言ってくる。

「あ、ごめん」

抱きかかえていた少女をゆっくり地面に下ろしてあげる。

「あ、ありがとうございました・・・なの」

「えっと・・・」

大丈夫か聞こうとして名前を知らない事に気づく。

まあ、さっき会ったというか助けたばっかりだもんね。

「なのは」

「え？」

少女が突然発した言葉の意味を図りかねて思わず聞き返してしまう。

「私の名前なの。私、高町なのはって言います」

高町・・・なのは・・・・なのは！？

これが、オレと未来の魔王、高町なのはとの出会いだった。

第０１話　出会いは突然に・・・なの（後書き）

さて、本格的な二次創作はからっきしの作者ですので、
感想と指摘をお待ちしています！
本気の意見には本気で答えますのでよろしくお願いします！！

第０２話　魔法少女は転生少年に恋をする・・・なの（前書き）

投稿遅くなってしまってすいません！
いわゆるスランプというか書き始めたばかりなのに構想が思い浮かばず
こんなに時間がかかってしまいました・・・
待っていてくれた読者の方！お待たせしました！
では、本編どうぞ～

第０２話　魔法少女は転生少年に恋をする・・・なの

「私、高町なのはって言います」

自動車に轢かれそうになっていた少女を助けたらなんとその娘が高町なのはという

唐突な出会いを果たしたオレとなのは。

これがご都合主義ってものなのかな～。

まあ、幸いな事にツァーリが居てくれたおかげでオレも、見た感じなのはも怪我は無かった。

ぶつかりそうになった自動車はオレ達が無事なのを確認するとそのまま走り去っていった。

「オレは篠原誓護っていうんだ。よろしく、なのは」

確かにちょっとビックリしたけどむしろ自然に出会えたから良かったのかな？

「誓護ちゃんって言うんだ～。じゃあ、誓ちゃんって呼んでもいいかな？」

あれ？なのはの言葉にオレは違和感を覚える。もしかして・・・・

「なのは、勘違いしてるかもしれないけどオレは男だよ？」

一瞬の間。

「ふえええぇぇぇぇぇぇ〜〜ッ！！！」

そして辺りに響いたなのはの声。

うわ、耳にキーンってきた。

「なのは、耳元で大声を出すのはちょっと・・・」

「ご、ごめんなさいなの！」

でも、大きな声を出したくなる気持ちも分からなくないだよな〜。

今のオレは女顔で肩までである黒髪にほっそりとした体つきだからな。

心の中で苦笑する。

『ほら！私の・・・・』

（ヴァイス）

『ご、ごめんなさい！だからお仕置きだけは・・・・』

（よろしい、少し黙っててね）

「あ、あの・・・誓ちゃん？」

おっと、ヴァイスとの念話に気を取られてなのはを放置しちゃった。

「どうしたの？なのは？」

「あ、あのね・・・・・・え？あれ？」

突然、ペタリと地面に座り込んでしまったなのは。

「だ、大丈夫か！？」

「にゃははは、いまさらびっくりしちゃったみたいなの。びっくりさせちゃってごめんなさい」

そう言って困り顔で笑う。しかし、何があるか分かったもんじゃない。

（ツァーリ、生体スキャンって出来るか？）

（マスター、私をなめてもらっては困りますですよ！そんなのは朝飯前なのです！）

念話で頼もしく答えてくれるツァーリ。

因みに生体スキャンとはその名前の通り体をスキャンして、体内に異常が無いかを調べる術のことだ。

（スキャン完了、どこにも異常は無かったですよ～）

（そっか、ありがとツァーリ）

（いえいえ、です）

『・・・なんか、ツァーリばかりフラグ立ててない？・・・ボソッ』

『考え過ぎだと我は思うがの・・・ボソボソ』

残り二機のデバイスの会話は誓護の与り知らぬ所で行われた。

ともかく、ホントになのはが無事みたいでよかった～

「ホント、びっくりさせるなよ。立てるか？」

オレの言葉に立とうとするなのはだったが、

本格的に腰を抜かしてしまったようで一向に立てそうにない。

仕方ない、ちょっと手助けするか

「ほら」

なのはに背中を向けてしゃがみ込んだオレ。

「え？」

疑問の声をもらすなのは。

「動けないんだろ？なら、オレがなのはを背負って家まで送るよ」

「そそ、そんなことしてもらわなくても！」

「だめだよ。オレに困ってる女の子を放っておけって言うのか？」

ちょっとずるいかもしれないけど、遠慮するなのはが断れないような言い方をする。

それになのはを放っておけないのも事実だしね。

「う～、分かったの」

目論見通りにオレに体を預けてくる。

しっかし、女の子ってこんなに軽いもんなんだな～

「お、重くない？」

「ん？平気だよ。むしろ軽すぎるぐらい」

「そう、なんだ／／／」

それから会話は続かなくなった。

ゆっくりとなのはを背負いながら家へ向けて歩く。

「何も・・・聞かないの？」

唐突になのはが問いかけてくる。

「ん？何を？」

「私が何で自動車に気づかなかった、とか・・・」

「なのはが言いたくないのなら、何も言わなくていいよ。オレはそ

ばに居るだけだから」

事情は大体分かってるしね。それに、なのはの気持ちが分からない訳じゃない。

オレも、一人だったからな・・・

「・・・・・うん。ありがとう、誓ちゃん」

オレが本心を言うと、なのはは小さくそう言った。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

なのは　ｖｉｅｗ

不思議、さっき会ったばかりなのに誓ちゃんは私の事をよく知ってる気がするの。

誓ちゃんには言えなかったけど、つい最近までお父さんが怪我で入院してたの。

お母さんもお姉ちゃんもお店で忙しくて、お兄ちゃんはお父さんの代りをしようと無理をして・・・

私だけ何も出来なくて、だから私はせめてみんなの迷惑にならない様にって良い子でいようとしたの。

でも、お父さんが退院した後もなんだか、

自分だけ家族からちょっぴり浮いてる気がしてとっても寂しくなっちゃったの。

だから、誓ちゃんが何も聞かないでただそばに居てくれるって言ってくれた時は

とっても嬉しかったの。

女の子みたいな男の子、私を助けてくれたカッコいい人、

抱きかかえられてた時はなぜかドキドキして顔が熱くなっちゃったの。

今も誓ちゃんの事を考えると胸がドキドキするの・・・

なんなんだろう、この気持ち？

でも、嫌な気持ちじゃない・・・・・

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

なのはを背負ってしばらく歩くと、転生前にアニメで見た風景が広がっていた。

なんかこういう風景を見るとホントになのはの世界に転生した、という実感が湧いてくる。

なのはの家がある場所は知ってるけど、一応聞いといた方がいいよね。

「そういえば、なのはの家ってどこにあるの？」

あくまで自然を装ってなのはに聞く。

「えっと、私の家はその道を真っ直ぐ行って右に曲がった所なの」

「分かった。後もう少しの辛抱だからね」

「うん！」

さっきは暗い表情をしていたけど、今の声を聞く限りもう大丈夫そうだな。

なにかふっきれたのだろうか？

とにかく、なのはにも言ったように後少しだ。

言われた通りの道を進むと確かに見覚え（アニメで）のある家が建

っていた。

「なのは、立てる？」

「うん、もう大丈夫だと思うなの」

なのはの返事でゆっくりと背中から降ろす。

「どうもありがとうございました！」

「いや、ホントに怪我が無くて良かったよ」

無事になのはを送り届けたオレはそのままその場を去ろうとしたが・・・

「待って下さい！」

「え？」

なのはに呼び止められた。

「あの、やっぱりちゃんとしたお礼とか出来てないし・・・」

ん～、そういうのを期待してなのはを助けたんじゃないんだけどな～

「家でご飯とかでも食べていきませんか？」

桃子さんの料理か、それは・・・・・・・魅力的だ。

「じゃあ「なのは！！」・・・・・はい？」

バタンッ！！という音と共に木刀を手にした男性、恭也さんが出てきた。

「あ、お兄ちゃん！」

「なのは、無事か！？」

なのはを自分の後ろに隠す恭也さん。

「ふぇ？どうしたのお兄ちゃん？」

恭也さんの勢いに疑問の声をあげるなのは。

あれ？なぜか恭也さんがオレの事を睨んでる気がする・・・

「貴様、なのはに何をした！」

「え？いや、オレはただ、なのはを家に送っただけで・・・」

あまりの気迫に応対がしどろもどろになってしまうオレ

「なのはの事を呼び捨てだと！？」

あの、落ちついて下さい恭也さん（泣）

「どうした恭也？お客さんか？」

そこへ出てきたもう一人の男性、士郎さんだ。

「父さん、こいつがなのはに手を出したらしいんだ」

あ～、そんな誤解を招くような説明をしちゃうと・・・・

「なに！？」

クワッと目を見開く士郎さん。

正直怖いです

「なのはは渡さんぞ！」

一瞬にしてヒートアップする士郎さんとそれにさらに感化された恭也さん。

これは・・・・終わったかな？

「「俺と勝負しろ！！」」

心の中でがっくりとするオレであった。

第０２話　魔法少女は転生少年に恋をする・・・なの（後書き）

続けて第０３話を投稿するので感想コーナーはそちらで！

第０３話　転生少年は兄と戦う・・・なの

どうしてこうなった！？

オレの頭の中はさっきからこの言葉で埋め尽くされている。

目の前には二刀（もちろん木刀）を構える恭也さん、しかも構え方が本気だ（汗

オレは木刀を一本、正眼に構えて相手の出方をうかがっている。

とりあえず士郎さんは退院したばかりということでオレへの制裁？には恭也さんが出てきた。

腰が抜けてしまったなのはを高町家へ送るだけだったのが何故こんな模擬戦なんかに・・・

「ハアァッ！！」

そんなオレの思考を隙と見たのか恭也さんが突っ込んでくる・・・迅い！

「クッ！」

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

木刀と木刀がぶつかり合う音が道場に木霊する

「ハアッ！セイッ！ヤアッ！！」

「クッ！フッ！ハッ！」

攻撃と防御の気合いがしばらく続き、恭也さんがオレの木刀を強打して一度距離を取った。

おそらく御神流『徹』その上位版の『雷徹』というものだろう。

ダメージを通されないようにしたから腕がビリビリいってる。

これが通されたら、いくらオレでも結構危ない。

「はぁ、はぁ・・・中々堅いな、誓護くん」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・恭也さんこそ、腕が痺れてきましたよ」

一連の打ち合いでオレは生前、というより転生前の事を思い出していた。

オレは転生前、じいちゃんから篠原流なる武術を習っていた。

篠原流は今時珍しい実戦を想定した流派で剣術の一刀、二刀は勿論、槍術、薙刀術、拳闘術、弓術など様々な技術があった。

そして、いつも稽古を始める前にじいちゃんはこう言っていた。

『篠原流の第一は相手を観察する事じゃ。

相手をしつこく観察し、

特性、弱点など自分に有利となる条件を見出していくのが全ての根幹になっておる。

そして、その弱点を見出したらそこを鋭く突き相手を倒す。

それまでは守りに徹するのが篠原流の基礎にして奥義じゃ。分かったか、誓護？』

ああ、分かってるよじいちゃん。恭也さんの弱点、見つけたよ。

「ちょっといいですか？」

「ん？どうした、誓護くん？」

オレは声をあげて模擬戦を中断させる。

「士郎さん、もう少し重くて長い木刀、二本ありませんか？」

「え？あ、ああ、あるにはあるが・・・振れるのか？」

唐突なオレの問いに驚く士郎さん。そのためかさっきの刺々しい雰囲気は無い。

「問題ありません」

士郎さんの問いに即答するオレ、むしろ今までは軽すぎるぐらいだ。

「はい、これでいいかい？」

そう言って士郎さんが木刀、さっきの物よりもズッシリとした質感がして長さも1．5倍ぐらいの物、

を渡してくれる。

一・二度振って感覚を確かめ・・・よし！

「お待たせしました、続きを始めましょう」

オレがそう言うと無言で恭也さんが木刀を構える。

しかしその気迫はさっきよりも格段に強くなっていた。

でも、

「これからはオレの反撃です。恭也さんには一切攻撃させません」

オレの言葉にピクリと動く恭也さんの木刀。

一瞬の動きだった。

ガンッ！

という木刀がぶつかる音と明らかに驚きの気配を見せる恭也さん。

「ハアッ！セヤァッ！ダアッ！」

ガンッ！！ガンッ！！ガンッ！！

先ほどよりも確実に重いオレの攻撃、それを間断無く恭也さんに叩

きこんでいく。

恭也さんが時々反撃をいれてくるがその全てを避けてその動きさえもオレは攻撃に組み込んでいく。

次第に防戦一筋になり始める恭也さん。

体力的には今のオレは恭也さんに劣る、しかしそのアドバンテージを使わせはさせない。

確かに恭也さんは剣術家として高い水準にいる。

それは今まで打ち合ってきて十分なほど分かった。

でも、いくら本人が強くても振るわれる木刀の方はどうだろう？

今まで一心不乱に打ち込んでいるように見えるオレの剣撃。

それをオレは全て同じ位置、一番木刀で消耗の激しい部分つまりは木刀の真ん中辺りに当てている。

これが、恭也さんの弱点。オレが勝つ為の道筋。

そして感じる予感。

後、三撃

「ハアッ！！」

恭也さんが『神速』を使ってオレの連撃から抜け出し、後ろから攻

撃してくるが・・・・

「篠原流移動術、『雷動』」

かき消えるオレの姿、次の瞬間には恭也さんの後ろにオレは居た。

「なっ！」

驚きの声をあげる恭也さん、その間にもオレは右の木刀を振り下ろす。

咄嗟に木刀でガードするがオレの耳には確かに、ミシッ！という木刀の悲鳴が聞こえた。

後、二撃！でも、もうチェックメイトだ。

もう一度距離を取られるがこれは恭也さんの意思で開けられた間合いじゃない。

これは、オレの間合いだ！

「篠原双天流、『円舞』！」

二刀を構えて恭也さん目掛けて突進する。

篠原双天流、『円舞』は突進をしながら最初に左の刀で相手の防御を崩し、

一回転して力を溜めた右の刀で止めを刺す技だ。

そしてこの『円舞』にはもう一つの技、というか特性がある。それは・・・・

「ハッ！」

ガツンッ！

左手の木刀が恭也さんの木刀を捉える。

ミシッ！今度ははっきりと聞こえた木刀の悲鳴。

「これでっ！・・・・ラストッ！！」

そして右手の木刀が再び恭也さんの木刀とぶつかり合う。

ガッ！・・・・バキッ、バキッ！

舞い上がる木刀の破片。そう、これがオレの狙っていた結果。

スタミナと体格の差を埋める短期決戦技、篠原流奥義、『武器破壊』。

実戦を想定してはいるが殺人剣ではない篠原流が誇る究極の剣技、これが『円舞』には備わっている。

「う、そだろ？」

今日何度目かの驚きを漏らす恭也さん。

士郎さんやなのは、高町一家の面々も驚きの表情を露わにしている。

まあ、オレもこの技を出したのはじいちゃん以来だから決して恭也さんが弱かった訳じゃない。

じいちゃんにはあっさり避けられたけど。

「オレの・・・勝ちですね。恭也さん」

木刀を下げ、そう告げるオレ。その言葉に放心状態から回復する恭也さん。

「強いな、誓護くん・・・俺の負けだよ」

そう言って差し出される剣術家らしい武骨な手

「はい、ありがとうございました・・・ところで、この勝負は何の勝負だったんですか？」

そう、オレは流されるままに恭也さんと模擬戦をしたが目的を聞かされていない。

「あ・・・ああ、それは・・・その・・・」

途端に歯切れが悪くなる恭也さん（実は模擬戦の直前になのはから説明を受けていた）

どうしたんだろ？どこか具合が悪いのかな？

「なのはが取られると思ったから、でしょ？恭也」

オレと恭也さんが模擬戦をしていた横から眼鏡に三つ編みの快活そうな少女、美由希さんが声をかける。

「取られる、ってどういう事ですか？」

「恭也、ついでに言うとお父さんも誓護くんになのはが取られちゃうんじゃないか、

って思ってたんだと思うよ。

二人ともなのはの事が大好きだからね～

試合前になのはから話を聞いてたはずだから大方引っ込みが利かなくなったんじゃない？」

「「うッ」」

美由希さんの指摘にうめき声をあげる二人。

どうやら図星らしいな、でも・・・

「オレはお二人からなのはを取ろうなんて思っていませんよ？」

「そういう問題じゃないんだよ」

と、苦笑しながら士郎さん。

その横でうなずく恭也さん。

「そうですか・・・うわっ！どうした、なのは？」

やたら目をキラキラさせたなのはが目の前にいた。

「誓ちゃんって強いんだね！お兄ちゃんがお父さん以外に負けるの、初めて見たの！」

「そうだね、私も恭也が負けるのはお父さん以外いないと思ってたからびっくりしてる」

とこれは美由希さんの弁。

「それはそうと・・・・」

「えっと美由希さん？なんで両手をワシャワシャさせながら近づいてくるんですか（汗」

「誓護くん、可愛すぎ～！！」

ガバッと抱きしめて頬ずりをしてくる美由希さん。

「うわわわッ！ちょ、ちょっとやめてください！美由希さん！」

拘束を抜け出そうとするが流石はと言うべきか、伊達に剣術をやっている訳じゃない様で一向に抜け出せない。

というか、美人に抱きつかれてオレの心臓が物凄い勢いでビートを刻んでいる。

「あ！お姉ちゃんだけずるいの！私も誓ちゃんにすりすりするの～」

そう言って抱きついてくるなのは。

勘弁してくれ～（泣）

「わあっ！誓ちゃんの頬っぺたすべすべしてて気持ちいいの～、すりすり」

「ほんとよね～、すりすり」

も、もう・・・限界・・・・

「キュウゥゥゥ～～～～」

「はわ！ど、どうしたの誓ちゃん！」

だ、男子校出身のオレに今の状態はキツイです・・・・

「誓護くんも大変だな」

「そうですね。でも、少しなのは達が羨ましい気が・・・・」

「あらあら、私も混ざっちゃいましょうか？」

桃子さん、それだけは全力で勘弁させて下さい。

洒落じゃなくてオレが死んじゃいます。

こうして、オレは美由希さんとなのはの二人（一時三人になりかけたが）

が満足するまで頬ずりされていたのだった。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

士郎　ｖｉｅｗ

正直、なのはが連れてきた誓護という少年には驚かされた。

恭也の『雷徹』を腕が痺れた程度で受け流し、

『神速』を見切ったまでかその『神速』を超える移動速度で恭也の背後にまわった。

そして最後に見せた武器破壊技、

いくらいつも使っている木刀だといえどもその消耗具合をあの短時間で見極め、

攻撃をそこに集中させるあの技量には目を瞠るものがある。
一見すると少女にしか見えないあんな小さな子供が、
これだけの技を身につけるのにどれだけの鍛錬を積んだか・・・
同じ剣術家としての尊敬を禁じえないな。
それに、私も久しぶりに刀を握りたくなってきてしまった。
目の前でなのはと美由希にじゃれつかれている誓護を見ながら私はそう思った。

士郎　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

「それじゃあ、今日はお世話になりました」

言葉と共にペコリと頭を下げる。

「いやいや、いい物を見せてもらったよ」

と士郎さん。

「俺もいい経験をさせてもらったよ。機会があればまた模擬戦が出来るといいな」

恭也さんは闘争心に燃える瞳で言ってくる。

「またおいでよ。いつでも歓迎するからさ」

優しげな笑みを浮かべて美由希さんが言う。

「今度はお料理も食べていってね。腕によりをかけちゃうから」

桃子さんが腕まくりのフリをしながら言ってくれる。

「次は、なのはとも遊んでね！誓ちゃん！」

元気いっぱいな声は、なのはのものだ。

高町家のみんなは温かいな。

忘れかけていた家族の温もりというものを感じて涙ぐみそうになる。

「はい、また今度お邪魔させて頂きます。その時はもっとゆっくり出来るようにしますので」

オレの返事に女性陣は小さく歓声を上げて、男性陣は挑戦的な笑みを浮かべてくれる。

いい家族だな、なのは

もう一度頭を下げて高町家を後にする。

それからしばらくして、

『マスターって、とぉっても強いんですね！』

金の宝石に銀の鎖が巻き付いた意匠のデバイス形態から、

銀髪に金眼の少女姿のアウトフレーム形態になったツァーリが頭の上に乗りながら言ってくる。

今は辺りが薄暗くなり始めたばかりだからツァーリが人目につく事は多分、無い。

『そうよね～、流石私たちのマスター』

『うむ、確かに主の技量には驚かされたが、むしろ誇らしかったぞ』

他の二人も口ぐちに言ってくれる。

「まあ、転生前にじいちゃんから散々教わってたからな剣術は」

『さっきの、なのはちゃんのお兄さんをかわした技もですか？』

「ああ、そうだよ。あれは『雷動』って言って恭也さんの使った『

神速』に近い技なんだよ。

みんなは武田信玄って人の事、知ってる？」

『我は知らんのう』

『私もよ～』

『ちょっと待って下さいね』

ツァーリはそう言うと中空に左手をかざす。

すると、ポンっという小気味のいい音を立てて一冊の革張りの分厚い本が出てきた。

「ツァーリそれは？」

『これは、マスターの能力である知恵の泉（ミーミル）を具現化した物の簡易版です！

え～っと、検索開始（レスティヴァル）！』

ツァーリの言葉が発せられた瞬間に本が開き、バラバラとページがめくられる。

そして、とある一ページが開かれた。

『なになに、戦国時代の武将で軍略にすぐれ、巧妙な分国政治を行った人物であり、

信玄の旗印である風林火山は有名』

「そうそう、その信玄の事。それにしても、便利だな～それ」

『マスターも練習すれば使えるようになるですよ？』

「そっか。じゃあ、話を戻すよ。この武田信玄の旗印の風林火山は、

迅如風（ときことかぜのごとく）

徐如林（しずかなることはやしのごとく）

侵掠如火（おかしかすめることひのごとく）

不動如山（うごかざることやまのごとく）

の四つで構成されてるけど、本当はここに

難知如陰（しりがたきことかげのごとく）と

動如雷霆（うごくことらいていのごとし）

の二つが加わって

『其疾如風、其徐如林、侵掠如火、難知如陰、不動如山、動如雷霆』

って言うのが本当なんだ」

『ありました！孫子の軍争篇ですね！』

「そう。で、『雷動』はその中の『動如雷霆』を由来に持っている移動術なんだよ」

ちょっと長かったかな？

『へえ～、そういう事がスラスラ出てくるマスターはすごいです！』

ツァーリが無邪気に褒めてくれて、それがちょっとくすぐったい。

『それより、そろそろ着くんじゃないの？ツァーリちゃん』

『あ、そうですね・・・・はい！着きました！』

デバイスのみんなと話していたら、

いつの間にかヘカテーの用意してくれたというマンションに着いていた。

「ツァーリ、何階？」

（一番上の階です！）

再びデバイス形態になったツァーリが念話で答えてくれる。

エレベーターのボタンを押すと軽い浮遊感の後にピポンッという音を立てて止まった。

（一番奥から二番目がマスターの部屋です！）

ツァーリに言われた部屋の前に立ち、あらかじめポケットの中に入

っていた鍵で扉を開けた。

「遅かったじゃないか、少年」

そしてそのまま扉を閉じた。

「なあツァーリ、ここで間違ってないんだよな？」

（はい、ここがマスターのお部屋です～）

「そ、そうなんだ・・・・じゃあ・・・・」

もう一度、今度はゆっくりと扉を開ける。

「酷いじゃないか少年、いきなり扉を閉めてしまうなんて」

「なんで、こいつが！ヘカテーが居るんだよ！！」

オレを転生させた冥府の王にして転生を司る神、

ヘカテーが部屋のソファーでワイン片手にくつろいでいた。

第０３話　転生少年は兄と戦う・・・なの（後書き）

これで遅れは取り戻せたかな？
まずは感想を頂いたマーボー様！ありがとうございます！
他の読者の方ともども、本当にお待たせして申し訳ない！
どうぞこれからも三浦の不定期投稿にお付き合い下さい
それでは！三浦でした～
感想待ってま～す！！

第０４話　転生少年は夢を見る・・・なの（前書き）

遅くなりました！
今回は色々と伏線を張ってみましたw

第０４話　転生少年は夢を見る・・・なの

「なんで、お前が居るんだよ！？ヘカテー！」

なのはを家に送り届けてから自分の家に向かうと中でオレを転生させた神、ヘカテーが居た。

「なんで、と言われてもな・・・・ただ暇だったからとしか答えようがないな、少年」

ワインを呷りながら言うヘカテー

「暇って・・・冥界の仕事は！？」

目の前の神、ヘカテーは転生を司ると共に冥府の王なんてのを名乗ってる。

だからコイツが居ないと困るはずなんだが・・・

「あぁ、仕事ならネプチューンとハデスに押し付けてきた」

さらりとなんて事を言うんでしょうかね、この神様は

「ともかく、ここはオレの家なんだろ？」

「私が用意した物だがな」

「うッ・・・・」

確かに、それを言われるとオレは何も言えない。

「まあ、たまにしか来ないからそこまで嫌がる事は無いだろう？」

あ、ずっと居るわけじゃないんだ。

「分かったよ。一応転生させてくれた事もあるし・・・」

「うむ、素直な少年が好きだぞ私は」

「ッ！！」

ワインを飲んでいたからかほんのりと頬が赤いヘカテーにそう言われると少しドキッとする。

なにせ百人がみたら百人とも美人と答えるだろう容姿の持ち主なのだから。

『ヘカテー様！』

デバイス状態からアウトフレーム状態になったツァーリがヘカテーの胸に突っ込む。

そしてそれを迎えるヘカテー

「おお、久しい・・・という程間はあいてないな、ツァーリ。ヴァイスとシュバルツも」

『はい、ヘカテー様』

『うむ』

・・・・なぜかヴァイスがすっごい従順なんだけど

オレがマスターなんだよね？

『マスターは弄りやすいから、ね？』

あれ？オレの心が読まれてる！？

つかなんだよ。弄りやすいって！

「ハハッ、お前たちは退屈しなさそうだな」

『そうですね～、マスターって可愛いですし』

・・・・もう何も言わないよ

諦めの境地に入ったオレ。

「さて、からかうののはここまでにして・・・・少年」

突然真剣な声色になるヘカテー

「な、なんだよ？」

「セットアップもしくは魔法は使ったか？」

「一応、なのはを助ける時に使ったけど」

オレの答えに「ふむ」と思案顔になりブツブツ言いだすヘカテー

一体どうしたんだろうか？

「（こればっかりは実際に体験した方が早いか）・・・少年、ちょっと場所を変えるぞ」

「え？」

オレの返事を待たずにヘカテーの銀髪が輝きだす。

「うわ！眩しい！」

反射的に右手を翳して目を守る。

「よし、少年。もういいぞ」

「あ、ああ・・・・・って、ここ・・・・何処？」

ま、待て。落ち着けオレ。

まずは状況整理だ。

ついさっきまでオレはヘカテーが用意した自分の部屋に居た、それは間違いない。

で、なんでいきなりこんな何もない荒野にオレは立っているんだ？

『これは・・・異空間転移ですね！』

さっきと同じように知恵の泉（ミーミル）の簡易版

（めんどくさいから「智慧ノ書」と名付けよう）でバラバラとページをめくっていたツァーリが本から顔をあげて言う。

「そうだ、流石だなツァーリ」

『えへへへ／／／』

ヘカテーに褒められて嬉しそうにするツァーリ

つまりここはオレが居た世界とは別の世界って事か・・・

「察しがいいな、少年」

「だからなんでオレの思考が読まれてるんだよ！」

「私が神だからだ」

うわ～、即答だよ。しかも反論出来ないし、とりあえず・・・

「なんでオレをこんな所に連れて来たんだ？」

「なに、簡単なことだ」

そう言って右手で中空を握る。

否、その手の中には柄の長い鎌が握られていた。

そう、まるで死神の持つそれのような・・・

「って、なんの冗談だよ、ヘカテー！」

「簡単な事だ、私は口で教えるより実戦で教える方が好みだ」

その顔はさっきまでのオレをからかうような物ではなく、死を宣告する神の物だ。

言われなくてもヘカテーから流れ出る身を裂くような冷たい殺気で冗談でない事が分かる。

『主、セットアップせよ。ヘカテー様は・・・本気だ』

何でか分からないけど、とにかくやらなきゃやられる！

「シュバルツ、セットアップ！」

やけくそ気味に叫ぶオレの声にしっかりと答えてくれる頼もしい相棒。

『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ！』

シュバルツの声と共に溢れ出す白金色の輝き。

そうか、これがオレの魔法色なんだな・・・綺麗だ

『ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　ｓｅｔ　ｕｐ！』

ズボンにシャツ、そしてロングコートその全てが漆黒のバリアジャケットが身を包む。

漆黒の輝きが右手に収束して一本の太刀になる。
その刀身はシュバルツの持つ特性、全てを飲む込むような黒に染まっていた。
「ふむ、まずはそれでいいだろう。気を抜くなよ？」
次の瞬間にはヘカテーはオレの目の前に居た、鎌を振りかぶった状態で
「うわッ！・・・くそッ！！」
咄嗟に刀を鎌の軌道上に翳す、間を置かずに降りかかる途方もない重量の攻撃。
「ク・・・お、重い」
ヘカテーの細腕からは考えもつかないような重圧が刀を通してオレの腕に伝わる。
なんとか刀を逸らして鎌を受け流し、距離を取る。
「流石私が見込んだだけはある」
不敵に笑みを浮かべる。
『マスター、シュバルツだけじゃあちょっと頼りないかもよ？』
「なんだよヴァイス、今忙しいんだよ！」

ヘカテーの振るう鎌の攻撃を躱し、受け流し、防いでいく。

『あら、そんな事言わないでよ。これでもマスターのデバイスなのよ？』

「だったらどうしろってんだよ！」

叫ぶオレにヴァイスの答えは簡潔

『私をセットアップして』

「それでこの状況はなんとかなるんだな？」

『もちろんよ♪』

再びヘカテーと距離を取る。

「信じるぞ・・・・ヴァイス、セットアップ！」

『任されました♪・・・・ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ！』

ヴァイスの声と共に再度溢れ出す白金の輝き。

真っ白な輝きが左手に収束してシュバルツの同じ形状の太刀になる。

しかしその刀身は白、シュバルツと対極に位置し全てを生み出す特性を象徴する白に染まっていた。

溢れた白い輝きはバリアジャケットにも変化をもたらす。
黒一色だったバリアジャケットに白いラインが各所に走った。
誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

ヘカテー　ｖｉｅｗ

「よしよし、それでいい」

そんな姿を見てヘカテーは満足げに笑みを浮かべる。

『ヘカテー様もお人が悪いです。稽古をつけるのならそうおっしゃればいいのに・・・』

その横には銀髪金眼の少女、ツァーリが言う。

「なに、これぐらいしないと今の少年には敵わないだろう。なにせあの少年、我らが盟主と同じ力を求めたのだから！」

『だからっていきなり斬りかかることないじゃないですか！』

両手両足をバタバタさせながら意見するその姿は愛らしい少女以外の何物でもない。

「確かにそうなのだが、少年の力を”世界”が黙って見逃すか・・・
今は私の力で隠せてはいるが、何かの拍子に使ってしまうかもしれんからな。
鍛えられる時に鍛えた方がいいだろう。
しかし、もしもの時は・・・・任せたぞ、ツァーリ」
直前までの軽薄そうな口調とは別の、正に神の一人としての言葉。
それにツァーリは無言で頷いた。
「よし、ならばもう少し少年を揉んでくるか」
『お手柔らかにお願いしますですよ～』
ヘカテーの目線の先には白と黒を纏う一人の少年。
神と少年はその夜、幾度となくぶつかり合った。
ヘカテー　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ
ツァーリ　ｖｉｅｗ
「稽古なんだったら先に言ってくれよな」

『まあまあ、ヘカテー様も悪気があった訳じゃないんでしょ？・・・・多分』

「はぁ・・・とりあへず、今はゆっくり寝たい」

時刻は午前3時、いつもならぐっすりと眠っている時間だ。

更に今のオレは5才、体力も転生前と同じという訳にはいかない。

「お休み・・・ｚｚｚ」

『我も眠りにつくとしよう・・・・』

シュバルツの輝きが消え、スリープモードになった事を知らせる。

『あらあら、もう寝ちゃったわ～・・・・それにしても、マスターは寝顔も可愛いわね』

『ヴァイスさんも、マスターを起こさないようにスリープモードになるです。

わたしも実は結構寝むいんですよ？』

『はいはい、それじゃお休み～』

ヴァイスの輝きも消え、起きているのはツァーリ一人。

『さて、わたしはマスターが悪い夢を見ないようにしないとですね！』

智慧ノ書のとあるページを開く。

そこには、金髪の少女とその母親と思しき二人組が居た。

ツァーリ　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

？？？　ｖｉｅｗ

ゆらゆらと揺れている。

どことも知れない空間にオレは漂っている。

眼下に広がるのは風が優しく吹く草原。

そこでは金髪の少女と女性が楽しそうに話している。

微笑ましい光景だな、そう思った次の瞬間にはその光景は別の物に変わっていた。

横たわる金髪の少女にすがりつく金髪の女性。

その様子から少女が死んでいるのが分かる。

オレはそれをぼんやり眺めているだけ、

そんな無力な自分を恨めしく思う。

（・・・絶対、助けるからな・・・・）

ゆらゆらと揺れている。

どことも知れない空間にオレは目覚めるまで漂っていた。

???　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

ツァーリ　ｖｉｅｗ

『マスター・・・・』

智慧ノ書に映し出された光景を見ながら自らのマスターである少年を見る。

あどけない寝顔の彼は一体どれだけの覚悟をこれから背負っていくのだろう？

『それでもわたしは、マスターの味方です』

少女の呟きは夜の帳に消えていった・・・・

ツァーリ　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

第０４話　転生少年は夢を見る・・・なの（後書き）

次回は主人公設定、そして無印編開始です！
いましばらく三浦にお付き合い下さいｗ

第０５話　主人公設定１（前書き）

７月２６日、知恵の泉の項目を更新しました

第０５話　主人公設定１

名前：篠原誓護

年齢：５才（精神年齢は１７歳）

身長：１２０センチ

体重：２７キロ

身体的特徴

女顔で肩までかかる黒髪で手足はスラリとしていて、

パッと見はクール系美少女

チート能力

能力１

全ステータスＭＡＸ

能力２

複写眼（アルファスティグマ）（右目）

目にした武器や魔法を解析し、複写する事が可能

武器に関してはシュバルツと連動することで使用可能になる

能力３

知恵の泉（ミーミル）（左目）

世界全ての知識や起こっている事を知る事が出来る

知恵の泉に載っている武器はヴァイスと連動することで使用可能になる

また、副作用的なもので夢の中に情報が流れ込んでくることがある

（第０４話の？？？ｖｉｅｗは上記の状態）

・大海を割りし　神の大槍　其の銘は　神槍、グングニル
（白金色の光を放つ華麗な装飾を施された槍で知恵の泉の中で最強の攻撃力を持つ）

・大軍阻みし　金城堅固の魔盾（たて）　其の銘は　戦女神の盾　アイギス
（全身を覆うほど大きな盾で知恵の泉の中で最高の防御力を誇る）

第０６話　デバイス紹介～

・シュバルツ（インテリジェントデバイス）

男性で全てを飲み込む特性を持つ
複写眼で解析した武器やデバイスの形状に変化出来る
勿論、攻撃魔法も再現可能
待機形態は黒いブレスレット
武器形態は漆黒の刀身の戦太刀
バリアジャケットは黒のズボンにシャツ、ロングコート

・ヴァイス（インテリジェントデバイス）

女性で全てを生み出す特性を持つ
知恵の泉に載っている武器の形状に変化出来る
待機形態は白いブレスレット
武器形態は純白の刀身の戦太刀
バリアジャケットは白のズボンにシャツ、ジャケット

・ツァーリ（ユニゾンデバイス）

女性で複写眼で解析した情報の蓄積と知恵の泉の情報の整理を担う
銀髪金眼の少女で身長は自由に変化出来るが基本はミニマムサイズ
知恵の泉の簡易版、「智慧ノ書」を展開可能で分からない事があると
すぐに調べ始める
誓護の頭の上がお気に入りの場所で、

一般人が見ていない所ではよくこの場所に座っている
バリアジャケットは白地に銀のラインが入ったズボンとジャケット
そして金色の翼を背中に生やし、革張りの分厚い本（智慧ノ書）を
持っている
『？？？？？？』

デバイス効果

「ツインセットアップ」
詳細は不明

「トライセットアップ」
詳細は不明

第０６話　デバイス紹介～（後書き）

物語が進んでいく過程で？の部分は解放していきます！

第０１話　あ～、ジュエルシードが散らばっちゃったよ　ｂｙ誓護（前書き）

無印開始！
のはずが、少しまえのお話から始まります！

第01話　あ～、ジュエルシードが散らばっちゃったよ　by誓護

みなさん、お久しぶりです篠原誓護です。

かれこれ転生してから3年が経ち、

なのはと一緒に私立聖祥大付属小学校の3年生になりました。

入学手続きはどうしたか？

勿論ヘカテーがやってくれたよ、高町家の皆さんにもオレの遠い親戚と説明済みだし

原作通りなのははアリサやすずかと出会って、

一悶着あったけど今ではオレも含めて仲良くしている。

それにしても、オレが笑うとなのはだけじゃなくてアリサやすずかも顔を赤らめるのはなぜだろう？

すずかに至っては時々オレの首筋を見ながら「・・・おいしそう」

なんてセリフが聞こえるんですが・・・気のせいですよね

とりあえず二度目の小学校生活は順調に過ごせている。

ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピ・・・・カチッ

「ん・・・んん・・朝か」

時刻は只今午前４時、外は未だに夜の名残がある。

なんでこんな早くに起きるのか？

もちろん、日課のランニング、町内一周をするためだよ。

サッと顔を洗って完全に目を覚ましてからランニングウェアに着替え、

枕の横で丸くなっているツァーリを胸ポケットに入れる。

以前置いてランニングに行ったら物凄い勢いで怒られたからな。

それ以来、起きてる起きてない関係なしに連れて行くようになった。

朝早いから誰にも見られないしね

外に出ると朝の冷たい空気に思わず身震い、早く体を温めるために走り出す。

ゴールは高町家だ。

「ふん、ふん、ふん・・・・・あ、おはよう誓護」

「おはよう～、誓護くん」

「おはようございます、恭也さん、美由希さん」

町内一周を終えて高町家に着くと恭也さん達が素振りをしていた。

ツァーリはランニング中に起きたから高町家に着く前に

デバイス形態になってもらっている。

今でこそそれ程息が上がってはいないが、

ランニングを始めた当初はゼェゼェ言いながら

高町家に着いてちょっとした騒ぎになったりもした。

「あら誓護くん、今日も早いのね。はい、タオル」

「あ、ありがとうございます、桃子さん」

うん、今日も桃子さんは3児の母とは思えない若々しさだな

「あら～、うれしいわ」

うん、読心術も変わりなく冴えてますね

ヘカテーやデバイス達だけかと思ったら高町家の女性陣も出来るし、

最近はアリサやすずかまでオレの心を読んでくる始末・・・・

オレにプライバシーは無いのか！？

「誓護、早く来いよ」

不毛な思考におちいりかけた俺を呼び戻したのは恭也さんだ。
オレが中々行かないからしびれを切らしたらしい。
「あ、はい！今行きます！」
もらったタオルで体を一通り拭いて、
転生初日の恭也さんとの一件から使わせてもらっている木刀を手に取ってから
恭也さん達の隣で素振りを始める。
まずは右手だけで３００本、次に左手だけで３００本、最後に両手で４００本
計１０００本の素振りをする。
木刀が空気を断つ音が三つ、日が上がり始めた空の下に響く。
オレの好きな時間の一つだ。
丁寧に素振り１０００本を終えると時刻は６時半
そろそろ早朝修行を仕上げて家で着替えないと学校に間に合わなくなるな・・・
早朝修行の仕上げ、それは即興で刀の軌道を頭に描き、
その通りに動くだけだ。もちろん、二刀で
土日はこれが恭也さんとの無制限試合になって二人して倒れるまで

試合をするんだけどね

刀をだらんと道場の床スレスレまで垂らす。

一見するとただ突っ立ってるだけの姿勢しかし、

これがあらゆる動きに咄嗟に動ける篠原流最強の構え『無構え』

頭に描いたのは右から斜めに3本、左に水平2本

「はっ！」

裂帛の気勢とともに誓護は、音も風も置き去りにして動いた。

高町家の皆さんが見守る前で誓護の体が一瞬ぶれる。

一瞬ぶれて、ただそれだけだった。

構えは変わらずの『無構え』、姿勢さえも変わっていない。

変わったのは今まで風なんて吹いてなかった道場にそよ風が吹いている事だった。

「い、今のは・・・」

「なんなの・・・？」

驚き顔の恭也さんと美由希さん

「いえ、ただ単に斜めに3本、水平に2本斬っただけですけど・・・

」

まあ、少し迅いかもしれないけど

「いや、迅すぎるって・・・」

これは美由希さんの談、しかもまた心読まれたし・・・

「それじゃあ、オレは・・・」

「オレ？」

桃子さんのいつもとは違う声色が背後からかけられる。

これって殺気じゃないのかな（汗

「いや、ボクはそろそろ帰らなきゃ間に合わなくなるので」

「そう♪これはちょっとした差し入れだからね」

さっきの殺気が嘘みたいに無くなり代りにいつもの桃子さんが後ろに居た。

手にはケーキが入っていると思われる箱。

「あ、ありがとうございます」

そうそう、この3年間桃子さんに一人称をオレからボクに変えさせられたんだよね

最初はオレと言うだけで有名なＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩをされて・・・・

あれはトラウマものだった、うん。

「それじゃあ、皆さん今日もありがとうございました」

ペコリと頭を下げて高町家を後にする。

なのははどうしたかって？もちろんまだ夢の中だよ

とにかく早く帰って弁当を作らなきゃ

「アンタは何でそう毎日そんな豪華な弁当なの！？」

「そうだよね～、一体何時に起きてるの？誓護くん？」

「そうなの！私も聞きたいの！」

「あ、ははは・・・・・」

現在時刻は午後０時半、

学校の屋上でアリサ、すずか、なのはと一緒に弁当を食べてる最中だ。

周りの視線が痛いけど・・・

「くそ～、やっぱり顔か、顔なのか！」

「女みたいな顔して女に好かれるって・・・」

「男の敵め！！」

なんか聞こえるけどまあ、無視で大丈夫だろ・・・・多分

「え～っと今日は４時に起きて「４時！？」うん、
それで少しなのはの家で刀の修行して・・・」

「「な～の～は～！！」」

「ふ、ふぇ！？」

ガシッ！

「「ちょっと、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしようか」」

「いやあああああああああっ！！」

なのは、無事で居ろよ。

オレも頑張るから・・・

「「「「「誓護くん！」」」」」

「・・・はい」

「「「「「俺達もＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしよう」」」」」

「いやだ！！」

弁当を抱えてダッシュで階段を駆け降りる

「「「「「待てぇ！！」」」」」

「誰が待つか！血走った眼をした奴らに追いかけられたら誰でも逃げるって！」

もはや恒例となった昼休みの追いかけっこ、いい加減にしてほしいもんだよ

昼ぐらいゆっくり食わせろよ！

こうしていつも通りの日常が過ぎていった。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

？？？　ｖｉｅｗ

ゆらゆら揺れている

またここだ、最近は頻繁にここに来る

一昨日は金髪の少女、（おそらくフェイトだろう）

が一生懸命勉強している光景を見てその後に、

母親だと思われる黒髪の女性、（こっちはプレシアだと思う）
が酷い隈を作りながら研究室に籠っている光景を見せられたりした
初めてこの場所に来た次の日の朝、
ツァーリに聞いたらこれはオレの能力、「知恵の泉」によるものらしい
（んで、今日は何を見せられるんだ？）
辺りは灰色の空間で何やら波打ってる
そして一隻の宇宙船？みたいなものが灰色の空間を進んでいた
今までの経験上こうなったら・・・
ドカンッ！！
やっぱり・・・
目の前の宇宙船から炎があがり、そして爆発した
（ん？あれは・・・）
爆発した宇宙船から青い光が沢山散らばっていくのが見えた
（もしかして・・・ジュエルシード！？）
ジュエルシードと思しき光はそのまま鳴海市に落ちていってしまった
（あ～、ジュエルシードが散らばっちゃったよ）

ゆらゆら揺れている

意識が覚醒に向かう中、これから忙しくなるなとオレは思った

???　view　end

第０１話　あ～、ジュエルシードが散らばっちゃったよ　ｂｙ誓護（後書き）

次回から前書きや後書きの方法を変えていくので
感想とかありましたら書きこんで下さい！
もちろん本編の方への感想・誤字脱字指摘もお願いします！

第０２話　相談したい事があるのｂｙなのは（前書き）

今回から戦闘に入る予定が・・・・

第０２話　相談したい事があるの　ｂｙなのは

？？？　ｖｉｅｗ

ゆらゆら揺れている

何処とも知れない場所で一人の少年と一匹の化け物が戦っている所を俺は中空から眺めていた。

と、少年の手から緑色の光が幾何学模様が散りばめられた円陣を描きだす。

俗に言う魔法陣というやつだ。

「妙なる響き、光となれ！赦されざる者を、封印の輪に！ジュエルシード、封印！！」

（あの化け物、やっぱりジュエルシードの思念体か・・・）

思念体が少年に突進していき、その勢いのまま、展開された緑色の魔法陣とぶつかり合う。

激しい閃光と少年、思念体それぞれがあげる苦悶の声。

拮抗は長くは続かなかった。

思念体は魔法陣から弾かれ、傷ついた体を引きずりながら逃げていく。

少年もそれを追おうとするが、今の魔法で魔力を使いきったのかその場で倒れ、

しばらくするとフェレット？の姿になった。

ゆらゆら揺れている

フェレットになった少年が何か言っているようだが、

意識が覚醒に向かっているせいで聞きとれない。

しかし、一つだけ俺は覚悟を決めた。

例え何があろうと、俺が、俺の周りに居る全員を守る、と

ゆらゆら揺れている

？？？　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

なのは　ｖｉｅｗ

誓護が自分の家へ戻ってからの高町家、そのとある一室の静寂を

突然流れだした軽快な音達が突き破る。携帯の目覚ましアラームだ。

その部屋に主、高町なのはの朝はこのアラームで始まる。
ベットの上の膨らみがもぞもぞと動き出し、
中から伸びた手がアラームを止めると静寂が戻ってくる。
しかしそれも一瞬、勢いよく布団が撥ね退けられて未だ寝ボケ眼のなのはが起き出す。
「なんか、変な夢見ちゃった」
男の子と化け物が戦う夢。普通じゃありえない夢。
それに、最後に聞こえた男の子の声
―力を貸して・・・・魔法の・・・・力を・・・・
「魔法、って言ってたよね・・・・」
本とかの物語ではよく聞く言葉。本当にあったらいいなって思った事も沢山ある。
でも、本当は存在しないもの、それが私の魔法の考え方。でも、なぜか気になる。
「誓ちゃんに、相談しようかな」
あ、誓ちゃんっていうのは私と同い年の男の子の事なんだけど、
男の子なのに女の子みたいに可愛くてでも、

かっこ良くて勉強も出来て物知りな私の王子様なの！

「なのは～、朝ご飯出来たわよ～」

「は～い」

お母さんの声に大急ぎで制服に着替えて階段を降りて行った。

早く誓ちゃんに会えないかな～♪

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

今朝見た夢、あそこで戦っていたの少年はおそらくユーノだろう。

アニメで見た姿と似ていたからな。

今日の弁当を作りながら「知恵の泉」が見せた夢について考える。

原作通りなら今晩、なのははユーノに呼ばれて思念体の封印をする事になるだろう。

そうなるとだ、少し気になる事がある。

「ツァーリ、調べて欲しい事があるんだけど、いい？」

『はいです～、なんですか？マスター？』

頭の上に座るツァーリは「智慧ノ書」を取りだしながら答える。

「ジュエルシードと呼ばれるロストロギアについて。

特に思念体の強さについては詳しく調べてまとめといて、期限は今日のお昼まで。

お願いね？」

なぜ強さかと言うと、転生前に読んでたなのはの二次小説で俺みたいなのが居ると、

敵の強さが強くなる事があったからだ。

用心に越したことはないと思う。

『任せて下さい！』

そう言うと早速「智慧ノ書」で調べ始めるツァーリ。

三年間の付き合いで分かったんだけどツァーリはボクの

知恵の泉と複写眼の情報整理を担っている。

だから、ツァーリに頼めばどんな事でも調べてまとめてくれるんだ、

ほんと感謝してるよ

ちなみに、調べ物中はデバイス形態になれないからツァーリはお留守番だよ？

まあ、呼べばすぐ来れるから大丈夫だろ

「さて、お弁当も出来た事だし学校に行きますか」

色とりどりの具材を綺麗に盛り付けをして

弁当を包みランドセルを引っ掴むと家を後にした。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

アリサ　ｖｉｅｗ

「むき～！！また、負けたわ！」

悔しさのあまり奇声をあげる私こと、

アリサ・バニングスとそれを見て苦笑を浮かべている

私の親友のなのはとすずか、

そして勝者の笑みを浮かべる男の子、篠原誓護。

今は昼休みなのでいつものメンバーで昼ごはんを食べている、
そして話題は今日返されたテストについて。
「いや、アリサも５００点満点中４９９点ってのも十分凄いと思うよ？」
「それは！アンタが！いつも満点取ってるから言えることでしょ！？」
そうコイツは私が知っている限り入学してから一度も満点を取らなかった事は無い。
私もそれなりに勉強している自覚があるだけに
いつまでたっても誓護に勝てないのは面白くない。
でも、だからと言ってわざと負けるような事をされるのは、
ただ負けるのよりずっと嫌だから、
毎回テストの前に正々堂々と勝負をするように言ってある。
だからなのか今まで手を抜かれた事は無い。
だ、だから、その点は認めてやってもいいんだからね！
で、でも！べ、別にアンタの事を意識してるわけじゃないんだから！
あくまでライバルとして見てるだけで・・・

「ア、アンタの事が好きとか、そういう訳じゃないんだからね！」

「え！アリサちゃん、誓ちゃんの事好きなの！？」

あ、思った事が口に出ちゃった・・・・

「え！？いや、そういうわけじゃなくて・・・・

ああ～！もう、誓護！アンタのせいだからね！」

頭がぐちゃぐちゃになってそれだけを言うと私は走って逃げ出してしまった。

でも、誓護の事が気になるのは嘘、じゃないのかな？

アリサ　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

昼ごはんを食べているとアリサが今日返されたテストの話で自分から先走って、

勝手に自爆して逃げて行ってしまった。

「アリサちゃん、もしかして・・・・本当に？

でも、そうだったら・・・フフフッ」

あの、なのはさん？キャラ違くないですか？

目の色が単色になっているように見えるのはボクの錯覚ですよね？

まさか、これがなのは魔王化の兆しなのか！？

『マスター、調べ終わったですよ～』

そんなボクの思考に斬り込んだのはツァーリの声だ。

（御苦労さん、ツァーリ。

んじゃあ、報告お願い出来る？）

『もちろんです～。

ジュエルシードの基本的な説明はいりますですか～？』

（いんや、大丈夫だよ。

発動時の脅威がどれくらいかの説明だけお願い）

『はいです！

えっと、簡潔に説明するとですね、思念体の強さはおよそSランク以上です』

（・・・根拠は？）

『はい、智慧ノ書のデータでは管理局のデータより

ジュエルシードの持つ魔力量が多かったです～』

（そっか、やっぱり・・・）

『マスター知ってたですか！？』

（あ～、まあ、はっきりとした根拠が欲しかったからね）

『ですか、それでは私は少し休みますですね～』

（分かった、お疲れ様、何かあったら呼ぶからね）

『分かりましたです～』

それっきりツァーリとの念話が途切れる。

「誓ちゃん、さっきから難しい顔してどうしたの？」

あ～、ツァーリとの念話に集中してたからなのは達に不審がられたかも・・・

ここはなんとか誤魔化すか

「いや、今日も二人が可愛いな～って思ってさ。見惚れてただけだから」

「なの！そ、それは・・・／／／」

「お世辞でも嬉しいよ／／／」

なんとかこの場は切り抜けられたかな？

「あ、そういえば誓ちゃんに相談したい事があるの」

「ん？どうした？」

まさか、誤魔化しきれなかった？

「今日、変な夢を見たの。

それでね、誓ちゃんに聞いて欲しかったの」

あ、そっち・・・・

「へ、へぇ～。それでその夢って？」

「うん、あのｎ・・・・」

と、なのはの声を遮るように昼休みの終了をチャイムが告げた。

「あ・・」

「なのは、また後で話は聞くよ」

「う、うん」

その場はこれで解散となってんだけど・・・

いきなりあんな事になるとは思わなかったよ

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

第０２話　相談したい事があるのｂｙなのは（後書き）

遅くなりました、三浦です
しかも今回も戦闘に入れないという・・・
すみませんでした！！
次回からはちゃんと戦闘に入ります！
ではでは、次回もよろしくお願いしますｍ（　）ｍ

第０３話　あ、あなたは一体何者なんですか？　ｂｙユーノ（前書き）

自らを呼ぶ声に答えた時、

少女の日常は消え去った

不屈の心を胸に、叫べ、セットアップ！

第０３話　あ、あなたは一体何者なんですか？　ｂｙユーノ

なのは　ｖｉｅｗ

今日のお昼ご飯の時、誓ちゃんに今朝見た夢の事を相談しようとしたら

チャイムが鳴っちゃって、

その後も塾の時間になっちゃったから結局相談出来なかったの。

あと、アリサちゃんは誓ちゃんの事を

「た、ただのライバルよ！」って言ってたけど、

本当かどうか心配なの！誓ちゃんの事を好きなのは私だけで十分なのッ！！

それで、アリサちゃん達と塾に行くときに近道を通っていたら、

夢で見たフェレットさんが綺麗な紅い玉を持って横たわっていたの！

アリサちゃんもすずかちゃんもびっくりして

大急ぎで病院に連れて行ったのだけど、

塾の時間になっちゃってその時はバイバイしたの。

そしたら、夜中に突然私を呼ぶ声が聞こえてきて
放っておけずに行ったら黒い化け物さんに襲われて、
フェレットさんから色々とお話して、
フェレットさんのお手伝いをする事になったの！
「あたたかい・・・」
手の中にある紅い玉、レイジングハートから温かな感触が伝わってくる。
「それを手に、目を閉じて心を澄ませて、
僕の言う通りに繰り返して・・・いい？いくよ！」
「・・うん！」
レイジングハートを両手で抱き締めて、
言われた通り目を閉じて心を澄ませます。
「我、使命を受けし者なり」
「我、使命を受けし者なり」
両手の中でレイジングハートが輝き始める。
「契約のもと、その力を解き放て」

「えと・・契約のもと、その力を解き放て」
大きく一度、レイジングハートが脈動する。
「風は空に、星は天に」
「風は空に、星は天に」
輝きが増し、脈動がはっきりとしたものになる。
「そして、不屈の心は」
「そして、不屈の心は」
二人の声とレイジングハートが放つ輝きと脈動が一つになる！
「「この胸に！」」
レイジングハートの放つ光が一層強まった！！
「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！！」」
『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ』
桃色の輝きが天を突き、なのはを包み込む！
なのはが着ていた服が学校の制服みたいなバリアジャケットに変わる。

レイジングハートも金と白の綺麗な杖となってなのはの左手に収まる。

「成功だ・・・」

「え、え？うそ～～～！？何・・・これ・・・・？」

「あ、前！」

自分に起こった変化に驚いているとフェレットさんが注意してきます。

言われるがままに前を見ると化け物さんが目の前にいました。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

レイジングハートが咄嗟に桃色の壁を張って守ってくれますが、それごと弾き飛ばされて後ろの壁に思いっきり体をぶつけてしまいます。

「・ぁ・・ぅ・・・」

物凄い衝撃が体を襲い、息が出来なって頭がフラフラします。

化け物さんはもう一度距離を取って突進して来ようとしています。

（私・・・死んじゃうのかな？）

フェレットさんの呼ぶ声が聞こえますが、段々まぶたが重くなって

きます。

（誓ちゃんに・・・会いたいな・・）

私はここには居ない、私の大好きな人の事を思います。

そして、私は意識を手放しました。

最後に見たのは、私に呼び掛けるフェレットさんと、突進してくる化け物さんと、

綺麗な白金色の光でした。

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

結果から言うと予想通りだった。

いや、予想以上だった。

状況を説明すれば昼休みの後、結局なのはと話す機会は作れず、

そのまま転がるようにジュエルシードの思念体との戦闘に突入してしまった。

なのはなら大丈夫かと思って少し離れた場所から様子を見てたんだけど、

防御魔法（プロテクション）ごと弾き飛ばされて壁に激突、

気絶までした時は流石に焦った。

再度なのはに突進してきた思念体を止めなかったら確実に死んでたな。

そして今、ボクの腕の中には気絶したなのはが居る。

淫獣（ユーノ）は慌てるだけで使い物にならない。

思念体は思念体でやる気満々な様子でボクに襲いかかるタイミングをはかっている。

「仕方ないな、介入するつもりはなかったんだけど・・・シュバルツ、セットアップ」

なのはを後ろに横たえてシュバルツをセットアップする。
『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ』
白金の光が弾けて漆黒が収束すると闇色のバリアジャケットに身を包み、
シュバルツの基本武器形態である黒刀を手にしたボクが立って居た。
「シュバルツ、なのはの周りに防御魔法を強めに張って」
『ｙｅｓ　ｓｉｒ、ｄｅｆｅｎｓｏｒ　ｐｕｌｓ　ｐｏｗｅｒｄ』
白金色の半球がなのはと傍に居たユーノを包み込む。
「あ、あなたは一体何者なんですか？」
ようやく自失状態から抜け出したユーノが聞いてきた。
その声には僅かながらも警戒の色が見える。
まあ、今のボクは顔を隠すのに仮面着けてるからね、
怪しく見えるのも仕方ないというものだ。
でも、まだボクが魔導師だって事は知られる訳にはいかないんだよね～、
フェイトとかの出会い的に。

「通りすがりだ」

口調も声色も普段とは違う感情を感じさせないものに変えて答え、背を向ける。

後ろから「嘘だッ！！」なんて声が聞こえた気がするけど無視を決め込む。

「ボクより思念体の心配をした方がいいと思うな～（ボソッ」

思念体はボクを敵と認識したらしく、ボクに向けて半端ない敵意を向けてくる。

しかも、遠くから警察のものと思われるサイレンが聞こえてきた。

「一気に片付けないとヤバイな・・・・シュバルツ、

ファーストセーフティー、リリース」

『ｙｅｓ　ｓｉｒ、ｆｉｒｓｔｓａｆｅｔｙ、ｒｅｌｅａｓｅ・・・・ｃｌａｓｓＳ』

普段大きすぎる魔力を押さえつける為にボクは

四段階のセーフティーロックを自分にかけてランクをＡ＋まで下げているんだけど、

今回は早急に目の前の敵を片づけないといけないので一段階解除した。

そのおかげでボクのランクはＳまで跳ね上がる。
黒刀を腰だめに魔力を集中させながら構え、
仮面越しに殺気全開の視線を思念体に向ける。
すると、思念体は怯えたように、その巨体を縮めた。
その隙を逃さずに踏み込んで魔力を込めた黒刀を右手で一閃。
同時に左手に封印魔法を展開、露出したジュエルシード本体にそれを叩き込む！
「ジュエルシード、ナンバーＸＸＩ！封印ッ！！」
白金色の光がジュエルシードに殺到し、その悪しき力を封印した。
『ｃｅｉｌｉｎｇ、ｎｕｍｂｅｒＸＸＩ』
封印したジュエルシードをポケットに入れて辺りを見渡す。
辺りは、崩れたブロック塀やアスファルトの剥がれた道路と荒れている。
サイレンの音もさっきより大きくなってきた。
「さて、今度は急いで逃げますか（ボソッ」
横たえていたなのはを再び抱きかかえて、

一応ながらも淫獣(ユーノ)を掴み近場の公園まで移動した。

とりあえず、ベンチに気絶したままのなのはを寝かせる。

「それで、あなたは一体何者なんですか？

名前は？管理局の方ですか？

そもそも、そのジュエルシードは危険な「黙れ」・・・・ッ！！」

マシンガンのように質問を浴びせてくるユーノを黙らせてなのはの状態を見る。

幸いにもレイジングハートが優秀だった為に大きな怪我な無いみたいだ。

「質問に答えようか、俺はさっきも言ったようにただの通りすがりだ。

お前に名乗る名前は無い。管理局とは無縁だ。

ジュエルシードの危険性については十分に理解しているし、

お前がこれを発見したのも知っている。

これでいいか？ユーノ・スクライア」

「な！なんで僕の名前を！？」

「そんな事はどうでもいい。最後に付け加えておく」

なのはを指差しながら、

「俺はお前の味方ではないが、なのはの味方ではある」

それだけを言って、その場を立ち去った。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

ユーノ　ｖｉｅｗ

突然現れた男。

圧倒的な力でランクＳクラス並のジュエルシードの思念体を封印し、

気になる言葉を残して立ち去った。

「僕の味方じゃないけど、彼女の味方か・・・・あれ？」

思考の中に違和感を感じる。

何か大事な事を見落としているような感覚。

「うにゃー・・・・あれ？」

身じろぎをして、手伝いを頼んでいた少女が目覚めた。

と、そこで自分が何を忘れていたのかを思い出した。

目の前に居る少女に協力を頼むことになった元凶、

「ジュエルシードを持って行かれた～～ッ！！」

「ふぇ！？何々？どうしたの？」

ユーノ　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

「ジュエルシード、確かにいただいたよ」

『マスターはしっかりしてますですね～』

『そうね～、でもいいんじゃない？』

「さってと、これでフェイトと会う口実が出来たぞ～」

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

こうして高町なのはの魔法少女覚醒は成った・・・・・・・

第０３話　あ、あなたは一体何者なんですか？　ｂｙユーノ（後書き）

少女の前に現れる新たな敵

少年は少女と

まだ見ぬもう一人の少女の為に暗躍する

次回、「あっれ～、犬ってこんなに可愛くなかったっけ？　ｂｙ誓護」

お楽しみに！！

第０４話　あっれ～？犬ってこんなに可愛くなかったっけ？　ｂｙ書護（前書き

魔導師となった少女の戦いは幕を開けた

新たな敵との遭遇

その場に現れる者とは・・・・？

第０４話　あっれ～？犬ってこんなに可愛くなかったっけ？　ｂｙ誓護

誓護　ｖｉｅｗ

先生の声が教室に響き、黒板に書かれる文字を写す音が聞こえる。

今は授業中しかし、ボクの意識は別の方向をを向いていた。

その方向とは、

（ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ・・・）

（ッ！・・・）

ユーノとなのはが交わす念話だ。

ついさっきの授業からずっと話しこんでいる。

昨日はあの後、ユーノの前から立ち去ってからバリアジャケットを解除、

いつものランニングウェア姿になってなのはの迎えに行き、

―もちろん、夜のランニングを装って―

高町家に送り届けた。

恭也さんに根掘り葉掘り聞かれて少し困った・・・

美由希さんのナイスフォローで事無きを得たけど。
ユーノにはボクが魔導師だという事はばれなかった。
まあ、―フラットセーフティー《魔力値を０にするリミッター》をかけてたから
当たり前なんだけどね
ジュエルシードの思念体と戦った場所は直してる時間が無くて結局大騒ぎになった
それを聞いたアリサとすずかが近くの病院に預けていたフェレット（ユーノ）
の事を心配していて、
なのはが今は自分の家に居ることなどを引き攣った笑顔で話していた。
そして時間は経って昼休み、午後の授業と進み、放課後となった。
途中までアリサとすずかとなのは、ボクとで帰り、
すずかを家まで送り、アリサは迎えの車に乗って帰って行った。
その時に送っていくと言われたが丁重にお断りさせてもらった。
なにせこの後にジュエルシードが発動するからね。

なのはもボクが乗って行かないのならとアリサの誘いを断っていた。
それからは商店街をウィンドウショッピングするなのはに付き合っていた。
ちなみにユーノとの念話は未だにアリサ達と帰っている時も続いていた。
そこへ、
ドクンッ！！
ジュエルシード発動の波動が来た・・・・・
誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

なのは　ｖｉｅｗ
アリサちゃん、すずかちゃんと別れてから誓ちゃんと帰っている時、
ドクンッ！！

昨日も感じたジュエルシード発動の波動を感じました。

（ユーノ君、今のって・・・）

（新しいジュエルシードが発動している。すぐ近く！）

（どうすれば！？）

ユーノの返答に慌て始めるなのは。

（一緒に向かおう、手伝って！）

（うん！）

そして私はジュエルシードの発動を感じた方向へと走り出しました。

少し離れた場所にある神社の鳥居の前でユーノ君と合流します。

「なのは、レイジングハートを！」

「あ、うん！」

階段を駆け上がるとそこには昨日会ったのとは違う化け物さんが居ました。

「現住生物を取り込んでる・・・・」

「ど、どうなるの？」

ガルルルルルルルッ！！

化け物さんが私を威嚇するように唸ります。

「実体がある分手強くなってる」

「今日こそは大丈夫だよ・・・・・多分」

一歩踏み出しながら私は言います。

「なのは、レイジングハートの起動を！」

「ふぇッ！？起動ッて何だっけ？」

「・・・・・・」

ユーノ君が唖然としてしまいます。

その間に化け物さんが私に向かって走ってきます。

「我は使命を、から始まるパスワードを！」

「ええ～～！？」

化け物さんがどんどん近づいてきます。

「あ、あんな長いの覚えてないよ～」

「ぬ、もっかい言うから繰り返して！」
「わ、分かった！」
でもその時には化け物さんが目前に迫っていました。
（だめ！間に合わない！）
思念体がなのはに飛びかかろうとしたその時、
桃色の光がなのはの手から漏れた。
「あ！レイジング、ハート？」
『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ』
光が収まるとなのはの手の中には、
レイジングハートがデバイスモードで握られていた。
（パスワード無しでレイジングハートを起動させた！）
化け物さんが警戒して距離を取っていましたが、
また飛びかかってきました。
「なのは、防護服を！」
「ふぇ！？あ、はい！」

『ｂａｒｒｉｅｒｊａｃｋｅｔ』

レイジングハートの声と同時に再び桃色の光が辺りに満ち始める。

そして、思念体となのはが激突した・・・・・・

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

「あっれ～？犬ってこんなに可愛くなかったっけ？」

元は犬のしかし、

凶暴性が大幅に増した思念体が鳥居の下に居る。

神社の上空、ボクはシュバルツをセットアップして、

金色の二枚翼で羽ばたきながらなのは達を見守っていた。

『今回のは現住生物を取り込んでいるので少々手強いかもしれんな』

「そっか、でもなのはの能力は本物だからな。

今はまだ、昨日の事が頭に残っていて本領が発揮出来ないかもしれ

なけど・・・」

眼下ではなのはとユーノが階段を登り切って思念体と対峙していた。

『ほう、主がそこまで言うのだから相当なものなのだろうな』

「まあね」

桃色の光が広がり、レイジングハートがなのはの手の中にあった。

「さて、少しばかり手伝ってきますか」

『うむ、それでは行くとしようかの』

向かう先ではなのはと思念体が激突していた。

『・・・・私の出番が無い・・・・グスン』

ヴァイスの呟きは誓護に届くことは無かった・・・・

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

なのは　ｖｉｅｗ

「ふぅ～」

白い、学校の制服の様な防護服が展開し終わり、

化け物さんももう一度距離を取り鳥居の上に居ます。

グルァアアアア～～ッ！！

咆哮をあげて高い位置から私に向かって飛び込んできます。

「きゃッ！！」

レイジングハートが防御魔法を展開してくれますが、

昨日と同じ様に圧されてしまいます。

（ダメ、なのかな・・・・？）

私が弱気になった時でした、

「あきらめるな」

その声が届いたのは。

「え？誰？」

後ろに誰かの気配を感じます。

「名乗る程の者ではないが、ハレルヤとでも呼んでくれ」

後ろの人、ハレルヤさんがそう言います。

「あ、あの！」

「何も言わなくていい、今は魔法の維持に集中しろ」

冷たい鋼の声、でもその中にある私への思いやりを感じました。

「はい！」

ハレルヤさんの言葉に魔法の維持に集中します。

「不安か？」

突然のハレルヤさんの問い掛け。

「昨日の場所に、俺も居た」

「え？」

「自分がちゃんと封印できるか不安か？」

「・・・・はい」

なぜか、この人になら本当の気持ちを言っていいような気がしました。

何となく雰囲気が私の大好きな人と似ているからかもしれません。

「お前は魔法の才能がずば抜けている。

ユーノにもそう言われただろう」

「・・・はい・・・う！」

化け物さんから掛る圧力が増し始めて支えきれなくなり始めます。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

そこへ、ハレルヤさんとは別の男の人の声がします。

ハレルヤさんのデバイスの声です。

「大丈夫か」

「はい」

目の前で私の桃色の魔法陣とは別に白金色の魔法陣が回っていました。

「ユーノの言っている事は正しい。

お前には魔法の才能がある」

「でも・・・」

仕方ないな、そんな声が聞こえた気がしました。

そして、

「ボクの事を信じろ、なのは」

聞き覚えのある声で

優しい囁きが、私にされました。

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

「ボクの事を信じろ、なのは」

そうなのはの耳元でボクはいつもの口調と声色とで囁く。

案の定、聞き覚えのある声になのはが驚いていた。

呆けているなのはに叱咤の声をかける。

「今から思念体を弾き飛ばす。

その後はお前が封印をしろ」

しばしの空白の後、なのはから力強い返事が返ってくる。

「分かりました、ハレルヤさん！」

「よし、いくぞ」

「はい！」

・・・もう、大丈夫かな？

そう思いながら思念体を睨みつける。

「やれ、シュバルツ！」

『ｒｅｆｌｅｃｔｉｏｎ』

一気に思念体が鳥居の下まで弾き飛ばされる。

「いまだ！」

ボクが言うまでもなく、なのはは封印の態勢に入っていた。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルＸＶＩ！封印！」

『ｃｅｉｌｉｎｇ、ｎｕｍｂｅｒＸＶＩ』

桃色の帯が思念体を捉えて封印する。

（やっぱり、なのはの魔法の才能は本物だな）

「それじゃあ、俺はそろそろ行かせてもらおう」

「ハレルヤさん！」

「なんだ？」

こちらを上目遣いで見ながら呼びかけてくる。

・・・どうでもいいけど破壊力あるな、これ

「また、会えますか？」

寂しそうな瞳、でもその中には不安は無かった。

無言を返答としてボクは翼を広げると空へと舞い上がった。

「きっと、会えるさ」

そう小さく呟きを残して・・・

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

現在のジュエルシード獲得数

誓護１個、なのは１個、残り１９個

第０４話　あっれ～？犬ってこんなに可愛くなかったっけ？　ｂｙ誓護（後書き

少女は少年によって恐怖の檻から解き放たれた

激化する敵との戦いに挑む少女

しかし、自らの過ちで現れた敵に少女は・・・

次回、「おいおい、こんなの相手にして大丈夫か？　ｂｙ誓護」

お楽しみに！

第０５話　おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ書護　上（前書き）

束の間の休息

少女と少年は一時の日常を過ごす

でも、その時は近づいて・・・

第０５話　おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ誓護　上

誓護　ｖｉｅｗ

皆さんこんにちは、最近真夜中に出かける事が多くなった篠原誓護です。

理由は簡単、なのはのジュエルシード集めを見守る為。

魔法少女になってから数日、なのはは四個のジュエルシードを集めた。

驚異的なスピードだけどそれだけ無理をしているという事で、

学校でもよく寝むそうにしている。

そんななのはも今日はお休みで、

ボクとすずかとアリサと一緒に士郎さんがオーナー兼監督をしている

翠屋ＪＦＣの試合の応援に来ている。

美少女３人（相手チームからは美少女４人）の応援に翠屋ＪＦＣの選手も

気合いが入っている様子だ。

試合が始まってボクも応援をしながら試合を見てるんだけど、

いつもの癖で何となく人の動きを分析してしまう。
相手チームのディフェンスの穴やオフェンスの穴を見つけては
そこに気づかない翠屋ＪＦＣのみんなを少し残念に思う。
「誓護くん、ちょっといいかい？」
と、士郎さんが話しかけてきた。
「どうしたんですか、士郎さん？」
「いや、実はね・・・」
とそこまで言うとグラウンドに視線を向ける。
そこには自分の足を押さえてうずくまる翠屋ＪＦＣの選手が居た。
「あの通り一人欠けてしまってね、誓護くんに選手として試合に出て欲しいんだ」
「でも、他に交代の選手が居るんじゃ・・・？」
「それが今日は偶々居なくてね。
どうしようかと思っていたんだが・・・どうだい？やってくれるかい？」
士郎さんが聞いてくる。

「・・・分かりました。
いつもお世話になっていますし、出来る事はやってみましょう」
「え！誓ちゃん試合に出るの？」
「へぇ～、アンタにサッカーの経験があったなんて「ないよ」・・・・は？」
アリサの言葉を遮ってボクは言う。
転生前にやってたのは基本的に篠原流の稽古で
後は高校の友達とやってたバスケぐらいだからね。
「ボクは今までサッカーをやった事は無いよ？」
驚きで固まっているアリサにもう一度言う。
「ちょ、アンタそれで大丈夫なの！？」
「まあ、大丈夫だと思うよ？」
そう言いながら士郎さんからユニフォームを借りて着替える。
「それじゃあ誓護くん、よろしく頼むよ」
「はい、士郎さん」
がんばってね～、とすずかの声援を受けながらグラウンドに入る。

相手のファウルなのでこちらの攻撃からだ。
試合再開の前に少しボールを触らせてもらってから位置につく。
ファウルをした相手選手は未だに申し訳なさそうにしていたが、
その他の何人かはボクが素人だと見抜いて隠しきれない笑みを浮かべていた。
――その幻想、ボクが粉々に砕いてあげるよ
試合再開のホイッスルが鳴った。
ボールを蹴りだして攻撃を開始する。
すぐにディフェンダーが寄ってくるが、
バスケでボールを取られない様にする要領で体を入れボールが取られる事を阻止する。
しかし、相手の対応も早かった。
もう一人、ディフェンダーが来てボクをプレスしようとする。
サッカーの経験が乏しいボクはそれに対応する策は無い。
だったらどうするか？
もちろん、圧倒的なスピードで陣形が出来る前に抜き去るさ。

ギアを一段あげてプレスが完成する前にディフェンダーの、その先に出る。

流石に相手も慌ててディフェンスの陣形が崩れた。

そこへ走り込んできた仲間にパスし、その仲間が見事にシュートを決めた。

湧きあがる歓声。

シュートを決めた仲間がハイタッチを求めてきてボクはそれに答える。

パチンッという小気味のいい音が鳴った。

やっぱりこの瞬間は気持ちがいい。

なんて言うか、一つになった気がする。

それからは翠屋ＪＦＣのワンサイドゲームだった。

ボクは見つけたディフェンス・オフェンスの穴を攻めて相手を混乱させ、

そこに走り込んだ仲間にパス、そのままシュート

という流れが完全に出来上がっていた。

試合終了間際にはボクがオーバーヘッドを決めて相手の戦意は完全

に削いだ。
今は翠屋に帰ってきてミーティング中。試合は勿論の事圧勝だった。
話を聞いた桃子さんからお疲れ様ということでケーキを御馳走してもらっている。
「それにしてもアンタ、あのプレーで本当にサッカーやった事ないの？
最後にはオーバーヘッド決めてたし・・・」
アリサの問いに食べようとしていたケーキの欠片を皿に戻す。
「サッカーをやった事ないのは本当だよ。
でもボクには篠原流があるし」
ちなみにアリサとすずかはボクが武流篠原流の使い手だという事は知っている。
「篠原流って武術なんでしょう？なんでそれがサッカーと関係があるの？」
とこれはすずかの問い。
「篠原流は相手を観察する事を根底におく武術だから、
相手の動きを読む事に関しては天下一品だよ」

言い終わると皿に戻したケーキの欠片を食べる。
チートだわ、なんて呟きが聞こえたけどまあ、実際にチート満載の体なのでスルーする。
「それで、3人ともこれから暇なのか？」
というボクの問いに、私はお父さんとお買い物、私もお姉ちゃんと、なのははお休みするの～、と三者三様の返事が返ってくる。
「そっか、じゃあボクはこれから用事があるから先に帰るよ。なのははちゃんと休むんだよ？最近眠そうにしてるんだから」
「わ、分かったの」「ん、じゃあね」「またね～」
翠屋を後にしてボクは、ツァーリに追跡させていたジュエルシードを追った。
誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

なのは　ｖｉｅｗ
誓ちゃんが帰った後、アリサちゃんとすずかちゃんもすぐに帰っち

ゃったので

私は、誓ちゃんに言われた通りにお昼寝をする事にしました。

ベットに寝転がるとすぐに眠くなってきます。

自分が思っているより私は疲れていたみたいです。

「なのは、寝るんだったらちゃんと着替えないと、

服にシワが寄っちゃうよ」

「ふぁ～い」

ユーノ君の言葉に起き上がってもそもそと着替えます。

その間にも眠気はどんどん強くなって、

着替え終わるのと同時に私はベットに倒れこみました。

なのは　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

ｎｏ　ｖｉｅｗ

交差点、一組の少年と少女が佇んでいる。

翠屋ＪＦＣのゴールキーパーの少年とマネージャーの少女だ。

と、少年がポケットから青い宝石の様な石を取り出す。

少年がその石を少女に差出し、

少女が喜んでそれを取ろうとして少年の手と触れた時、

青い光が二人を包み込んだ。

ｎｏ　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

第０５話　おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ誓護　上（後書き）

日常は再び終わりを告げた

自らを責める少女に少年は・・・・

次回、「おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ誓護　下」

お楽しみに～

Ｐ．Ｓ．やっとテストが終わったので更新再開します

相変わらずのんびり書いていくのでどうぞお付き合い下さいｍ（＿）ｍ

第０６話　おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ誓護　下

誓護　ｖｉｅｗ

来た！

もはや感じ慣れたジュエルシード発動の波動に

待機していた隔離結界を展開する。

「ツァーリ、結界の維持を頼む。

ボクはなのはの所に行ってくる」

『はいです～、任せて下さい！マスター』

なのはと別れた後に合流したツァーリに結界を譲渡してシュバルツをセットアップ、

ハレルヤの仮面を被り、金色の双翼を羽ばたかせて

なのはの元へ向かう。

その間に辺りを見回すと広がる木々の枝が

結界の表面を伝って更に広がっていた。

「おいおいこんなの相手にして大丈夫か？

結界張らなかったら町が滅茶苦茶だったよ・・・っと、この辺りかな？」

なのはが昇ってくるであろうビルを見つけてそこに降り立つ。

程なくしてなのはとユーノが来た。

「あ！せ・・・・じゃなくて、ハレルヤさん」

「お前か、早くセットアップしろ。

今もアレは人の願いを叶えようと成長している」

ボクの言葉にレイジングハートをセットアップする。

ていうか、今言い直したけどハレルヤがボクだってことバレてるよね・・・

気づいてないふりをしてくれるのはありがたいけど、フェイト的に。

O☆HA☆NA☆SHIの時の言い訳考えておかないとな～、

と考えているうちにバリアジャケット姿になったなのはが来た。

その表情は僅かばかり暗い。

「あの、ハレルヤさん。

私、言わなくちゃいけないことがあるんです」

無言でボクは先を促す。

「実は私、今発動しているジュエルシードを

誰が持っていたか知っていたんです。

知っていたのに、発動を止められなくて、

見間違いだ、勘違いだって自分に言い聞かせちゃって・・・・」

「お前の言いたい事はそれだけか？」

なのはの告白を遮ってボクは言う。

少し胸が痛んだが予想以上にジュエルシードの成長が早い。

原作と違って成長が止まらないので結界内はほとんど木々に覆われている。

なによりなのはの罪悪感を薄める為に張った結界がこのままじゃ解けてしまう。

だからボクは心を隠して鋼の声で話す。

「ただ自分の過ちを人に話して、それだけで満足か？」

「そんな言い方しなくてｍ・・・

「お前は黙ってろ。俺は今、彼女と話している」・・・ッ！」

ユーノがなのはを庇うが今のなのはに必要なのはそんな優しさじゃない。

「・・・満足じゃ、ないです。満足なわけないじゃないですか！」

「ならば！お前はどうしたい。いや、どうするべきだ？」

「私は・・・・封印します。

残りのジュエルシード、これを含めて１６個全部！

ユーノくんに頼まれたからじゃなくて、自分の意思で！だから！」

レイジングハートに光が灯る。

「教えてください。これから、どうすればいいのか！」

「・・・分かった。お前のその意志、見せてもらうぞ」

「はい！」

ボクを見るその瞳にはさっきまでの暗さが無くなり、

意志の強さが宿っていた。

「まず俺が木の成長を抑える。

その間にお前はジュエルシード本体の場所を探して、

見つけたら封印しろ」

「はい！」

返事と共に足元で魔法陣が輝く。

『ａｒｅａ　ｓｅａｒｃｈ』

「リリカルマジカル、探して災厄の根源を！」

レイジングハートの音声となのはの声、

桃色の光が四方に飛んでいった。

「ボクもがんばらなくちゃな（ボソッ

行くぞ、シュバルツ！」

『ｙｅｓ　ｓｉｒ・・・ｓｔｅｅｒｗｉｎｇ』

応答の声と広げられる金色の双翼。

結界内が一望できる高さまで飛び上がり、黒刀を上段に構える。

「天衝きし月の牙！月牙、天衝ッ！！」

黒刀を振り下ろすと白金色の斬撃が成長を続ける木の枝に飛んでいき、切り裂く

これを何度か繰り返すと随分と枝が減り、結界のきしみが無くなった。

それと同時になのはからジュエルシードの本体を見つけたと念話がきた。

「よし、ならばすぐに封印し「無理だよ！」・・・なぜだ？」

ユーノがボクとなのはの会話に割り込んでくる。

「ここからじゃ遠すｇ「できるよ！」・・・なのは？」

「そうでしょ？ハレルヤさん、レイジングハート？」

「ああ、今のお前なら出来る」

『ｓｈｏｏｔｉｎｇｍｏｄｅ・・・ｓｅｔｕｐ』

レイジングハートが音叉状の射撃モードに移行することでなのはに答える。

『ｓｔａｎｄｂｙｒｅａｄｙ』

桃色の翼が広がって封印をする準備は整った。

「行って、捕まえて！」

レイジングハートの前後に円環状の魔法陣が現れ、桃色の光りが放たれる。

一直線に飛んでいったそれはジュエルシード本体とそれを握る二人の人間を捉えた。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルX、封印！」

『ｃｅｉｌｉｎｇ・・・ｎｕｍｂｅｒＸ』

ジュエルシードが封印されて結界内の木々が消えていく。

（「ツァーリ、もう結界解除してもいいよ」）

（『はいです！それにしても疲れましたです～』）

（「お疲れ様、先に帰って休んでて、ボクもすぐに帰るから」）

（『分かりましたです～』）

白金色の結界が霧散するとジュエルシードによって傷ついた街並みは元通りになった。

「あの、ハレルヤさん、ありがとうございました」

「何がだ？俺は何もしていない」

「でも、私を励ましてくれました」

「あれはお前が悪い方向に考えが向いていて、

自らの力を充分に発揮出来なくなっていたからだ。

お前の力は強い、それは誇ってもいい事だ。

だが、それは同時に責任を負うという事だ」

「責任？」

「ああ。

力の強い者は力の弱い者を守る義務がある。

今回はお前がそこから逃げようとしていたから正しただけだ」

「それじゃあ、ハレルヤさんも責任を負っているんですか？」

なのはの真剣な視線を感じてボクも仮面越しだけどなのはの目を見て言う。

「ああ、俺も責任を負っている。

今はお前ともう一人、一人ぼっちで寂しがり屋の少女を助けなくてはならない。

これは責任というよりは俺がやりたい事だ」

「そうお、なんですか・・・じゃあ私はその子とお友達になれますか？」

「なぜだ？」

なのはの問いに質問を投げ返すボク。

でも、理由は分かっている。それは・・・

「私も同じだからです。
私も寂しがり屋だから。
一人で居るのがどれ位つらいか知ってるから」
そうだよな、なのはも一人の寂しさは分かるもんな。
「そうか、出来ればそうしてくれるとありがたい。
彼女は少し堅い所があるからゆっくり歩み寄ってやってくれ」
「はい！」
なのはの元気な返事にボクは安心する。
ついさっきまで暗い顔をしていたのが信じられないぐらいだ。
これでなのははもう大丈夫。
何があっても自分を見失わないで進んでいける。
次はフェイトだ。
寂しがり屋で、どうしようもなく寂しがりなのに母の為に強くあろうとする健気な少女。
次は彼女と彼女の心を助ける。

そう胸に決意しながらボクはなのはと別れた。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

現在のジュエルシード所持数
誓護一個、なのは五個、フェイト０個

第０６話　おいおいこんなの相手にして大丈夫かよ？　ｂｙ書護　下（後書き）

少女は知った、責任の重さを

少年は思った、一人ぼっちの少女の事を

そして少年と一人ぼっちの少女が出会い・・・・

次回「よ、よろしくお願いします　ｂｙフェイト」

お楽しみに～

第07話　よ、よろしくお願いします　byフェイト　上（前書き）

ついに金色の少女が世界に降り立った

少女と少年は出会い、

そしてその先にあるのは・・・

第07話　よ、よろしくお願いします　ｂｙフェイト　上

？？？　ｖｉｅｗ

ゆらゆら揺れている

白い靄がかかった視界の中でボクは”彼女”を見つけた。

夜の闇に映える金色の髪が夜風になびいている。

何か話しているのか口が時折動いているが、相変わらず聞こえてはこない。

と、近くに居た赤い毛並みの大きな犬が遠吠えをあげた。

覚醒が近いのだろう、それっきり白い靄は濃くなっていき視界を完全に遮った。

ゆらゆら揺れている

？？？　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

朝、いつものように町内を走って、高町家で剣術の朝練を終えて帰

ってくると、
見覚えのあるしかし、この世界では始めて会う少女がボクの部屋の前に立っていた。
背中に流れる二つに分けられた金髪に黒を基調とした服装、
手にはケーキの箱を持って、そして脇には赤い毛並みの大きな犬を連れている。
その姿を見てボクは初めてこのビルに来たときに感じた既近感の正体に気づいた。
（・・・見覚えがあったのは”彼女”が住むはずの家だったからか）
察するに、引越しの挨拶に来てくれたのだろう。
でもいくらなんでも早すぎはしませんかね？まだ朝の7時ですよ
「あの、どうかしましたか？そこはボクの部屋ですが・・・」
それでも声をかけるボク。もちろん口調は初めて会った人への話しかけ方だ。
「あ、隣に引っ越して来ました、フェイト・テスタロッサです。
この犬はアルフ」
「ワン！」

フェイトが名乗り、アルフが紹介されて自己紹介代わりの一鳴きをする。

「そうですか、ボクは篠原誓護。この部屋に住んでます」

ボクも名乗り、しゃがんでアルフの頭を撫で始める。

「えっと、ご両親は居ませんか？

挨拶をしておきたいんですけど・・・」

「二人とももう居ないよ。ここにはボク一人で住んでるんだ」

瞳が蕩け始めたアルフを更に撫でながら答える。

「あ・・ごめんなさい・・・」

しゅん、という音が聞こえて来そうなほどフェイトが気を落とす。

そういえば、なのはにこの事を知られた時も同じ反応されたな。

なんだかんだで二人は似ているのかも。

「気にしないで、テスタロッテさん。

これから学校だから、あんまりおもてなし出来ないけど、

お茶ぐらいならだせるよ？入ってく？」

どこかへ遠くトリップしているアルフを軽く叩いて呼び戻し、

ボクはフェイトに提案する。

「フェイトでいいです。今日は挨拶だけで、これケーキです。良かったら食べてください」

ケーキの箱を差し出してくるフェイト

「じゃあフェイト、ボクも誓護でいいよ。それからケーキありがとう。これからよろしくね」

ケーキを左手で受け取り、ニコッと笑いながら右手を差し出す。

「よ、よろしくお願いします」

フェイトも一拍遅れて右手を差し出してきて、

ボクとフェイトは握手をして別れた。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

フェイト　ｖｉｅｗ

「きれいな子だったな」

玄関の扉を閉めながらさっき出会った男の子を思う。
肩まである長い黒髪に細長い手足で、一見すると女の子にも見えるが
あの強い意志を灯した瞳は紛れもなく男の子のものだ。
「誓護・・か・・フフッ」
昨日、こっちの世界に来たばかりでうまくやっていけるか心配だったけど、
誓護みたいな優しそうな人がお隣さんなら大丈夫そうだ。
「アルフ、もういいよ」
足元の赤い毛並みの大きな犬、もといアルフに声をかける。
「そうかい？それじゃ・・・・」
すると、アルフから女性の声がし光に包まれ転瞬、
赤毛の犬耳と尻尾をもった女性が立っていた。
「うう～ん、それにしてもアイツ、誓護って言ったかい？
犬の扱いに慣れてるね。撫でてもらって凄く気持ち良かったよ」
大きく一つ、伸びをして女性の姿になったアルフが言う。

「そうなんだ。
私、こっちの世界に来てうまく生活できるか心配だったんだけど、
お隣さんの誓護が良い人みたいで大丈夫そうだよ」
「そりゃよかったよ。
で、これからどうするんだい？」
何も無い部屋を見渡しながらアルフが言う。
「午前中は少し休もう。
昨日は夜通しでジュエルシードの捜索をしてたから」
部屋に置いてあった荷物からパジャマを取り出して着替え、ベットに横になる。
「そうだね、あたしもそうするよ」
ベットに横になったフェイトの隣にアルフが寝転び、二人は仲良く眠りについた。
フェイト　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ

「すずかの家に招待？」

昼休み、いつものメンバーで弁当を広げていると鈴鹿が提案してきた。

「うん、今度のお休みなんだけど・・・」

「私は平気よ」「なのはも～」

アリサとなのはがすぐに返事を返す。

「ボクは・・・」

すずかの家といえば、なのはとフェイトの出会うイベントが発生する場所だ。

問題はどうやって二人に気付かれないように、

なのはとフェイトに合流するかだけど・・・なんとかなるよね！

「ボクも喜んで行かせてもらうよ」

「よかった～、おいしいお茶とお菓子を用意して待ってるからね！」

嬉しそうに微笑むすずか。うん、癒されるな～

こうしてボクは今週末、すずかの家に行くことになった。

その日の放課後、ボクはスーパーに居た。
冷蔵庫にあった一週間分の食糧がなくなったからだ。
ボクは一週間毎に買い物をしている。
その方が無駄遣いをしなくて済むからね。
「え～と、これで全部かな？」
朝書いたメモを見ながら買い忘れが無いことを確認する。
カートの上下にあるカゴはどちらも食材で一杯になっていた。
「よし、買い忘れは無いな。それじゃ、レジは～っと・・・・あ」
レジに向かおうとした時、見覚えのある金髪が視界をよぎった。
「お～い、フェイト！」「え？あ、誓護」
見立て通りフェイトが振り返る。アルフはお留守番のようで居なかった。
「フェイトも買い物か？」「うん、色々と揃えないといけない物もあるから」

ボクの食材で一杯になったカートを見ながらフェイトが答える。
そして、フェイトのカートを見てボクは凍りついた。
「あ、あの・・・・フェイト？」「なに？」
可愛く首をかしげるフェイト。
「どうして、カートにカロリーメイトとドッグフードが山積みなの？」
そう、フェイトの押しているカートには
カロリーメイトとドッグフードだけが積み上げられていた。
「どうしてって・・・これがご飯だからだけど・・おかしいかな？」
「おかしい、絶対におかしい」即答するボク
こんな偏った食事とも言えない栄養摂取をすると後々の健康に害をなす。
「でも、私料理出来ないし・・・」
「それでも他に何かあるでしょ？」
「簡単に済ませられるし・・・」
「分かった」「え？」

ボクの主夫魂に火がついた。

「今日からボクがフェイトに料理を教える。

まずは手作りの料理がどれだけおいしいかを教える！

後でボクの部屋に来て、用意してるから！」

そうまくし立ててボクは、

フェイトに確認を取らずに話を進め立ち去った

「え、え？」

一人取り残されたフェイトは暫く、その場で呆然としていた。

そして夕食時、ボクの部屋にはオムレツの残り香が漂っていた。

「ご馳走様でした」「お粗末様、どうだった？」

「うん、とってもおいしかったよ」

ボクの目の前に座る金髪の少女、フェイトの答えにボクは安心する。

「よかった。でもごめんね、急にしかも無理やり呼んじゃって・・・」

「ううん、平気だよ。そうだよね、アルフ？」

「ワン！」

フェイトの呼びかけにドッグフードを食べ終えたアルフが返事をする。

「そう言ってもらえると救われるよ。

ボクって偶にこんな事があるんだよね、特に家事関係とか」

「ちょっとビックリしたのは確かだけど、

私の事を考えてやってくれたんだよね？

だったら私の方こそお礼を言わなきゃ・・ありがとう、誓護」

そう言って頭を下げるフェイト。

「じゃあここは、どういたしましてって言っておこうか。

ボクは洗い物してくるから、フェイトはゆっくりしててていいよ」

「分かった」

食べ終わったお皿を持ってキッチンに入る。

これで一つ目の目的は達成、って言ってもこっちが本命で

もう一つの方は単に都合が良かったからなんだけど・・・

さて、フェイトはリビングに飾ったジュエルシードに気付くかな？

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

フェイト　ｖｉｅｗ

誓護がキッチンに行った後、私はアルフを撫でながらソファに座っています。

（「それにしても、いいのかい？」）

と、アルフが念話で話しかけてきました。

（「え？なにが？」）

（「だから、夜はジュエルシード集めをするはずだったのに」）

（「う～ん、でもせっかくのお誘いだったし。

誓護は良い人みたいだからなるべく仲良くしたいから」）

（「確かにアイツは良い奴だけどさ～、

出来るだけ早く回収しないとあの鬼ババアが・・・」）

（「母さんの悪口を言わないで」）

それっきりアルフとの念話は途切れてしまいました。

アルフが私の事を思って言ってくれているのは分かってはいるんだけど、

アルフはもちろん、母さんのことも大好きだから、

そんな大好きな人から大好きな母さんの悪口は聞きたくありませんでした。

それからしばらく、誓護が洗い物をする音を聞きながら、

ゆっくりとした時間を過ごしていました。

と、突然アルフが立ち上がって、同時に念話がきました。

（「フェイト、あれ！！」）

なにやら焦った様子で部屋のある一角を凝視しています。

それに促されるように視線をそこに向けて、私は驚きました。

「ジュエル・・シード・・・」

「やっと気付いたね。このまま気付かないかと思ったよ」

「ッ！！」

背後から突然かけられた声に驚いた私は振り返ります。

そこには、いつの間にか洗い物を終えていた誓護が、

頭の上に銀髪金眼の小さな少女を乗せて立っていました。

フェイト　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

第０８話　よ、よろしくお願いします　ｂｙフェイト　中

誓護　ｖｉｅｗ

「やっと気付いたね。このまま気付かないかと思ったよ」

ボクの声にフェイトが物凄い勢いで振り返る。

「ツァーリ、待機解除」

『はいです～。長距離転送の待機を解除、転送しますです』

ツァーリの声と共に部屋が白金色の光で包みこまれる。

それが収まった時には、何も無い荒野にボクとフェイト達は立っていた。

「どう、して・・・・誓護が？」

「黙っててごめん。ボクも魔導師なんだ」

空中に浮いているジュエルシード、ナンバー２１を掴み取りながらフェイトに謝る。

「・・・・管理局は？」

フェイトが一言だけ問う。

「管理局は関係ないし、今のところ興味も無いよ。

ボクは完全にフリーだよ」

正直にありのままをボクは話す。

「私達の事も知ってるの？」

再びの問い。

「知ってた。ボクにはそういう能力があるから」

能力って言っても転生前の記憶と

知恵の泉（ミーミル）が時折見せる”今現在起こっている現実の出来事”の夢だけど。

「私に仲良くしてくれていたのは、それの為なの？」

ジュエルシードを示しながらフェイトが言う。

「違う。ボクはただ「こんのぉ～～～！！」・・・・・ッ！」

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

ボクが言い終わらないうちに人間形態となったアルフが拳を打ちこんできて、

シュバルツがそれを防御魔法で防いだ。

「信じていたのに！アンタならフェイトの良い友達になってくれる

と思ってたのに！」

アルフが自分の心情を叫びながら拳を何度も打ちこんでくる。

ボクはそれを防ぐだけ。反撃もせずにただ黙っている。

「あの娘は今まで友達なんてものは一人も居なかったんだ！

ただ唯一、母親代わりだったリニスも・・・・」

「プレシアに契約を解かれてもう居ない、か」

「ど、どうしてそれを！？」

ボクの言葉に驚愕を顕にして拳の連打を止めるアルフ。

「言ったでしょ？ボクにはそういう能力があるって。

ボクはフェイトとアルフの全てを知ってるよ」

もう一度、はっきりと言う。

アルフも一先ず落ちついたのか攻撃を再開する様子は無い。

「それじゃあ、誓護は私達の邪魔をするの？

するんだったら、バルディッシュ」

『ｇｅｔ　ｓｅｔ・・・ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ・・・ｓｅｔ　ｕｐ』

フェイトが呟き、バルディッシュを鎌形態でセットアップして構える。

アルフもそれに倣い、拳を構える。

「う～ん、邪魔するつもりは毛頭無いんだけど、

むしろ協力しようかと思ってるぐらいなんだけどな。

でも、そっちがその気なら相手をするよ？ただ、ひとつ条件を付けるけど」

「条件？」

「（協力の部分はスルーなんだ・・・）ああ、ボクはフェイトを気絶させたら、

フェイト達はボクに攻撃を通したら勝ちって事で。

勝ったらこのジュエルシードをあげるよ」

「アンタ、アタシ達の事を舐めてるのか？」

アルフが突っかかってきた。

本当に元気だよねこの人、いや狼か。

「一つ言わせてもらうけどボクはフェイト達の事を舐めてるわけじゃない。

けど、さっきのアルフの攻撃、ボクには一撃も入ってないよ？」

「う！・・・・・」

「それじゃあ、始め「ちょっと待った！」・・・何、ヴァイス？」

フェイト達との会話が終わり、戦闘に入ろうとした時、

左手首のヴァイスから制止の声が響いた。

「マスター、最近シュバルツばっかり使って私の事、忘れてるんじゃない？」

「何が言いたいの？」

「だから、今日は私を使ってよ。ね、マスター」

猫なで声でお願いしてくるヴァイス。

確かに最近はシュバルツばっかり使ってたけど・・・。

ヴァイスでの戦闘は少し特殊だからな。

まあでも、フェイト達も力を見せれば

特にアルフはちゃんと言う事聞いてくれるようになるかな？

思考を一瞬でまとめて結論を出す。

「分かった。ヴァイス、セットアップ」

『やった！ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ・・・ｓｅｔ　ｕｐ』

ヴァイスをセットアップすると

ボクは白いバリアジャケットに包まれて、白刀を左手に持っていた。

「接続（アクセス）」

同時に左目の『知恵の泉（ミーミル）』を開く。

途端に感じる全能感。

黒かった左目は青く、輝いていた。

ヴァイスでの戦闘はミーミルをを使いながらが基本となる。

「それじゃあ、行くよ！」

白刀を構えて一足にフェイトへと斬りかかる。

「させない！」

それにアルフが反応して白い軌跡を遮った。

何度か攻撃をするが、意外にアルフの防御が固い。

それに加えてフェイトのフォトンランサーがボクを狙ってくる。

それでも一撃も攻撃を加えられずにいられるけど、
段々フェイトの早さが増していく。
ボクのスピードも四つのリミッターをかけている現状ではこれで一杯一杯だ。
「ヴァイス、早速だけどいくよ！」
「いいわよ～、今の私、最っ高に調子がいいから！」
・・・少し、ヴァイスが壊れちゃったかな？
今度はちゃんと交互に使っていこう。
「何をするつもりなの？」
ボクとヴァイスの会話にフェイトが気付く。
「いや、少し本気を出そうかって話をしてたんだよ」
「心配するなよフェイト！ただの負け惜しみなんだからさ！」
アルフが笑みを浮かべながら言う。
決めた、最初はアルフだ。
意外に固いこの防御を一撃で破れば話を聞いてくれるかもしれないしね。

さて、それが可能な武器は・・・

「大海を割りし　神の大槍　其の銘は――」

左目が輝きを増すのと同時にヴァイスが白金色の光を放ちながら、

その形を巨大な槍へと変える。

「――神槍、グングニル！！」

華麗な装飾が施された白金色の光を放つ槍をアルフに向かって投げる。

それは、アルフが咄嗟に展開した防御魔法を紙の様に突き破り、

その胸へと突き刺さった。

第０９話　よ、よろしくお願いします　ｂｙフェイト　下

「アルフ！」

悲鳴のような声をあげるフェイト。

その目の前でアルフが目を一杯に開きながら

ゆっくりと後ろに倒れていった。

その傍らにフェイトが駆け寄る。

「アルフ！死んじゃやだよ！・・・「死んでないはずだよ」・・・え？あ・・・」

血の赤は辺りに無く、突き刺さったと思われた槍の先端は丸く潰されていた。

「よかった・・・。アルフ、少し休んでてね。私、ちゃんと勝つから」

気絶したアルフを地面に横たえて、フェイトはボクに向き直る。

「誓護が強いのはよく分かりました。それでも、私はあなたに勝ちます」

ボクを完全に敵として認識して言い放つ。

「それでいいよ。全力で、ボクにフェイトの覚悟を見せて。

・・・・リロケート、ヴァイス」

手元に槍状態のヴァイスを呼び戻して構える。

「行きます！」

フェイトがソニックムーブで飛び込んできた。

振り下ろされる鎌を槍の柄の部分で受けて弾き、一息で四つの刺突を放つ。

それを危なげなく避けたフェイトは、

距離を置いてフォトンランサーの連撃を放ってくる。

槍を回転させて円盾のようにして飛んでくるフォトンランサーを防ぐが、

狙いが逸れたのか幾本かが地面に当たり、砂埃をあげる。

（いや、むしろこっちが本命かな？）

相手の思考を脳内でトレースし、相手の考えを読み解く。

視界を遮るのが本当の目的で、

他が当たればラッキー程度だったとすると本命は・・・

「こっち！」

槍を背に向けるとボクに当たる寸前だったフェイトの鎌を防いだ。

「ッ！！」

驚きの声をあげるが、反撃される前にボクの前から消える。

ヒットアンドアウェイ戦法。

スピード特化のフェイトには有効な戦法だ。

それに加えてこの砂埃、常人ならばさっきの一撃で倒されていただろう。

常人ならば、だけど。

（生憎、人間の枠を超えてる自覚はあるんだよね）

槍を振り回して砂埃を吹き飛ばし、フェイトの姿を探す。

が、いない。そこへ・・・

「アルカス、クルタス、エイギアス

疾風なりし天神、今導きのもと、撃ちかかれ

バルエル、ザウエル、ブラウゼル」

フェイトの詠唱する声が聞こえてきた。

「この詠唱は！・・・・ッ！バインドか！？」

突然、体が反転して地面に叩きつけられる。

見れば三重のバインドが両手両足に架せられていた。

これは流石に今のボクじゃあすぐには抜けられない。

「フォトンランサーファランクスシフト

撃ち抜け、ファイヤー！！」

フェイトの周りに浮かぶ待機状態のフォトンランサーが一斉に放たれる。

しかも、原作と違って微妙に角度がつけてあって、

ボクに全部のフォトンランサーが当たるようになっている。

「よく考えたな～って感心してる場合じゃない！

あれは本当にヤバイんだ！ヴァイス！」

『はいは～い』

バインドで拘束された時に手放してしまったヴァイスが、

ボクの呼びかけに応じて独りでに浮かびあがってボクの目の前に来る。

「大軍阻みし　金城堅固の魔盾（たて）　其の銘は――――戦女神の盾、アイギス！」

再び左目が青く輝き、ヴァイスがボクの全身を覆う程、

大きな盾に白金色の光を放ちながら変化する。

そして、フォトンランサーの雨がそこに突き刺さった。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

フェイト　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

「はぁ、はぁ、はぁ・・・これなら、誓護も」

大量に魔力を消費したせいでフラフラしながらも私は、

誓護がいるであろう場所を見る。

フォトンランサーを撃ち込んだ場所は砂埃があがっていて何も見えないが、

そこに動きは、ない。

「やったの、かな？」

「いや、まだ終わってないよ」

轟音と共に風が吹き荒れ、砂埃が晴れた。

そこには、バインドを抜けてしかも無傷で立つ、誓護が居た。

「なん、で？確かに全部、当たったはずなのに・・・」

今日何度目かの驚きを口にする。

フォトンランサーのファランクスシフトは私が使える魔法の中でも、

リニスが認めた最強のもの。

なのに、それの全部に当たりながらも無傷だなんて・・・

「そんなの、ひどいよ・・・」

私がそう呟くと誓護は少し、困ったような顔を見せた。

その表情に、ドキッとする。

「ひどいって言われても、攻撃当たっちゃったらボクの負けだし。

そしたら、ボクの目的果たせないし・・・でも、フェイトを困らせたい訳じゃないし」

誓護の困る姿が少し、心地いい。

「でも、誓護は私の邪魔をするんだよね？」

悲しげな表情をして言う。

悪戯心が芽生えた。

魔法で勝てないというのは今ので十分に理解出来た。

でも、私の言葉で困る誓護の姿をもう少し見ていたい。

私は何時しか、そう思っていた。

「いや、本当に邪魔するのかと聞かれれば、そういう訳じゃないんだけど。

でも、この状況は邪魔してる・・・よな～」

『マスター、からかわれている事に気付いて下さい・・・・』

「え、そうなのか？」

デバイスに諭されて、私を見上げる誓護。

その顔に笑ってしまう。

「人の顔見て笑うなんてひどいな～。

でも、笑ってるフェイトの方が可愛いよ」

「そ、そんなこと・・・ないよ」

自分でも顔が赤くなっているのが分かる。

「それじゃあ、決着をつけるよ。

ボクも、もちろんフェイトもこのまま終わる訳にはいかないからね」

「うん」

誓護の言葉に私はバルディッシュを構える。

誓護も白刀にデバイスを戻して構えました。

同時に左目の青い輝きも消えて、元の黒い瞳に戻っていました。

そして、少しの静寂の後に私達は動き出しました。

フェイト　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

今までしかめっ面だったフェイトがようやく笑ってくれた。

それがボクの顔を見てだという事は置いておくけど。

とにかく、今回はなんとかアイギスの展開が間に合ったけど、

そうじゃなかったら確実に攻撃が当たっていた。
チートなボクだけど、今はセーフティーを掛けているからフェイトと同等、
もしくは少し強いぐらいの力で戦っているから戦況は簡単にひっくり返ってしまう。
だから、次で決着をつける。
「それじゃあ、決着をつけるよ。
ボクも、もちろんフェイトもこのまま終わる訳にはいかないからね」
「うん」
フェイトがボクの言葉にバルディッシュを構える。
ボクもヴァイスを白刀に戻して構え、ミミールを閉じた。
次に互いが出すのは小手先の技を完全に排除した実力のみの一撃。
余計な物を使う必要は無い。
フェイトは上、ボクは下だから位置の有利さはフェイトにある。
上からの攻撃は重いし、迅いからね。
でも、篠原流にはそれに対応する技もある。

少しの相対の後にボクとフェイトは同時に動いた。

「はぁぁあぁぁッ！！」

フェイトはセオリー通り、ボクへ一直線に突っ込んでくる。

ボクはその武器、バルディッシュの動きに集中する。

全ての動きがスローになる。

大きく振りかぶられたバルディッシュの振り下ろされる様がはっきり見えた。

それに白刀の腹を合わせて攻撃を逸らしながらバルディッシュの柄の部分に白刀を

―勿論、刃の部分じゃなくて峰の部分を向けて―走らせる。

敵の攻撃を利用して攻撃をするカウンター技。

「篠原流『鬼走り』！」

白刀が、フェイトの体を捕えた。

地面に激突し、砂埃が再び舞い上がる。

手ごたえはあった。

バリアジャケット越しだったから、少し強めに打ったけど痣とか残らないよね？

「流石にそれはw『ｐｈｏｔｏｎｌａｎｃｅｒ　Ｆｉｒｅ』・・・
え？」
砂埃の中からフォトンランサーが三つ、バルディッシュの声と共に
飛んできた。
「あれで気絶しなかったのか！？」
驚きつつも的確にフォトンランサーを両断する。
爆散したそれに、砂埃が晴れる。
その先では、フェイトが地面に横たわっていた。
「え、あれ？『Ｆｉｒｅ』しまっ！」
再びのバルディッシュの声。
後ろに感じる攻撃の気配。
そして・・・・・バシッ！・・・・ボクの白いバリアジャケットに
一点の攻撃の痕が付いた。
「・・・やるね、バルディッシュ」
ダメージを感じさせるほど強くはないが、
確かにバルディッシュが放った最後の攻撃はボクに届いた。

『ｓｉｒの願いを叶えるのが私の役目ですから』

誇るように言うバルディッシュ。

実際、誇りに思っているんだろうな。フェイトのデバイスである事を。

「ボクの負けだよ。

フェイトが気絶してるのはそうだな～、砂埃のせいで見えなかったってことで」

『ｔｈａｎｋｓ』

バリアジャケットを解除してポケットからジュエルシードを取り出す。

それを気絶したフェイトの手にしっかりと握らせた。

「それじゃあ、帰ろうか」

フェイトを抱え、こちらも気絶したままのアルフを回収して、

ボクは自分の部屋へと戻った。

誓護　ｖｉｅｗ　ｅｎｄ

ジュエルシード回収個数

誓護：０個　なのは：４個　フェイト：１個

第０９話　よ、よろしくお願いします　ｂｙフェイト　下（後書き）

二人の少女は出会う

今はまだ、分かりあえないけど

きっと、いつかは・・・

次回、魔法少女リリカルなのは　～転生少年は世界に抗う～

『そこまでだ　ｂｙ誓護』

お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9907q/

魔法少女リリカルなのは　～転生少年は世界に抗う～

2011年7月26日14時06分発行